

磯部大王自転車道整備事業に伴う
ひがし げ と
東海道遺跡発掘調査報告

1989・3

三重県教育委員会

序

文化財保護法第3条、及び、第57条の4の規程により、三重県教育委員会では文化財保護行政の一環として、埋蔵文化財包蔵地の周知徹底に努めています。そのための方策の一つとして、県庁内関係課、各教育事務所毎に文化財保護に関する連絡会議等を開催するとともに、日常は文化財パトロール活動、遺跡分布調査等で強化をはかっています。公共事業に伴う埋蔵文化財の保護については、年度当初に府内の開発関係各課に事業計画を照会し、事前にその工事予定地域内の文化財の所在を確認し、その保護にあたっています。

ここに調査結果を報告する東海道遺跡は、磯部大王自転車道整備事業に先立ち、その存在が確認されたものであります。そこで、その保護に努めるよう協議してまいりましたが、やむなく発掘調査を行なうこととなりました。調査の結果、16世紀を中心とした遺物の出土により、東海道遺跡の一端を明らかにすることができました。こうした遺跡が、旧志摩国内や他地域との関係の中での当時の生活、社会を具体的に語りかけてくれる歴史資料として学問的にも重要であることは言うまでもありません。

調査にあたっては阿児町教育委員会、国府漁業協同組合、地元国府地区の方々及び県土木部志摩土木事務所の各位には惜しみない理解と協力を得ました。ここに末尾ながら記して、心より感謝の意を表します。

平成元年3月

三重県教育委員会

教育長 中林 博

例　　言

1. 本書は磯部大王自転車道整備事業に伴い緊急発掘調査を実施した志摩郡阿児町国府字東海道・一色に所在する東海道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は次の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県教育委員会事務局文化課
主事　伊藤裕偉
3. 調査にあたっては、県道路建設課、志摩土木事務所、阿児町教育委員会、国府漁業協同組合ならびに地元各位の方々に協力を得た。
4. 報告書作成にあたっては、奥義次、小林秀、中嶋千年の諸氏をはじめ多くの方々の助言を頂いた。また、市川嘉子氏には甚大な協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は、伊藤が担当した。
6. 挿図の方位は全て真北で示してある。
7. 写真図版の遺物の番号は、実測図の番号と対応させてある。
8. スキャングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I.	調査の契機と経過	1
II.	地理的・歴史的環境	2
III.	調査の成果—層位と遺構—	5
1.	基本層序	5
2.	A区の層位と遺構	6
3.	B区の層位と遺構	9
4.	C区の層位と遺構	9
5.	D区の層位と遺構	11
6.	遺構のまとめ	13
IV.	調査の成果—出土遺物—	14
1.	金属製品	14
2.	石製品	14
3.	木製品	16
4.	土器類	17
V.	調査のまとめ	26

図 版 目 次

P L . 1 調査区近景・作業風景	P L . 7 D区
P L . 2 A区	P L . 8 出土石製品・貨幣・土器
P L . 3 B区	P L . 9 出土土器・土師器(鍋)
P L . 4 B・C区土層断面	P L . 10 出土土器・土師器(鍋・羽釜)・陶器・磁器
P L . 5 C区第2面	P L . 11 出土土器・陶器
P L . 6 C区第1・2面	P L . 12 出土杭及び東海道地区表採和鏡

挿 図 目 次

Fig. 1 西暦1900年前後の国府地区	1	Fig. 11 D区平面図	12
Fig. 2 遺跡位置図	2	Fig. 12 出土貨幣拓影	14
Fig. 3 遺跡周辺地形図	3	Fig. 13 出土石製品実測図(1)	15
Fig. 4 東海道地区表採和鏡拓影	4	Fig. 14 出土石製品実測図(2)	16
Fig. 5 調査区位置図	5	Fig. 15 C区溝 S D 10出土杭実測図	17
Fig. 6 A区平面図	6	Fig. 16 出土土器実測図(1)	18
Fig. 7 調査区土層断面図	折り込み	Fig. 17 鍋 A・B 分類図	19
Fig. 8 B区およびC区北部第1面(上・下)平面図	9	Fig. 18 出土土器実測図(2)	20
Fig. 9 C区第1面・第2面平面図	10	Fig. 19 出土土器実測図(3)	21
Fig. 10 C区溝 S D 10杭列検出状況平面・立 面図	11	Fig. 20 出土土器実測図(4)	22

表 目 次

Tab. 1 出土土器観察表(1)	23	Tab. 3 出土土器観察表(3)	25
Tab. 2 出土土器観察表(2)	24		

I. 調査の契機と経過

磯部大王自転車道整備事業は、一般地方道安乗港線道路特殊改良計画地に接続する形で進められており、今回調査を行った字一色・東海道の地に工事が及ぶこととなった。それに伴って本県教育委員会事務局文化課は事業予定地内における遺跡の有無を確認するために分布調査を行った。その結果、事業予定の道路センター杭のNo.17からNo.35にかけて遺物の散布が認められた。

そこで事業地内の第1次調査（試掘調査）を昭和62年3月中旬に行った。その結果、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が認められ、中世の遺跡であるものと思われた。

この結果をもとに県土木部道路建設課および志摩土木事務所と協議を行い、その保存策などを検討した結果、事業予定の道路センター杭No.27からNo.39については保存不可能のため、第2次調査を行うこととなった。

調査は昭和63年9月19日から開始し、10月21日に現場作業は全て終了した。最終調査面積は615m²であった。

調査期間中はたびたびの雨と時期的に水位が高かったこともあって、海拔1mにも満たない調査区はすぐ水浸しとなつた。また、土壤が砂質であったために水に浸るとすぐに崩れ、水の引いた後の調査区は何とも無残であった。このように困難を極めた調査であったが、それでも何とか無事に終了できたのは地元各位の援助の賜物であった。ここに作業にあたっていただいた方々の御芳名を記して感謝の意を表します。（順不同）

浜村嬌子 下村松代 岸本幸子 橋爪富子 長谷川秋枝 下村晴代 浜野悦子 南千鶴 濱村さきよ 瀬田喜久子 仲村三佐子 仲村恵子 浜野晴美 小橋員子 宮世古せつ子 浜野喜美代 中村美恵子 辻美智子 市場隆代 鈴木世喜藏

調査の方法

調査区の総延長は260mに及び、その間に車道・畠道が3本走っている。農作業も行われているため、

道路を境目として北からA～Dの4地区を設定した。A区からC区中央にかけての道路センター杭が一直線であったため、それを基準ラインとし、調査区が曲線を描いているC区南半とD区についても同様の地区割を設定した。

掘削は、雑草が生い茂っていたA・C・D区の表土約20cmをバックフォーにて行った以外は全て人力掘削による。



Fig. 1 西暦1900年前後の国府地区
(大日本帝国陸地測量部編1885・1917年 より)

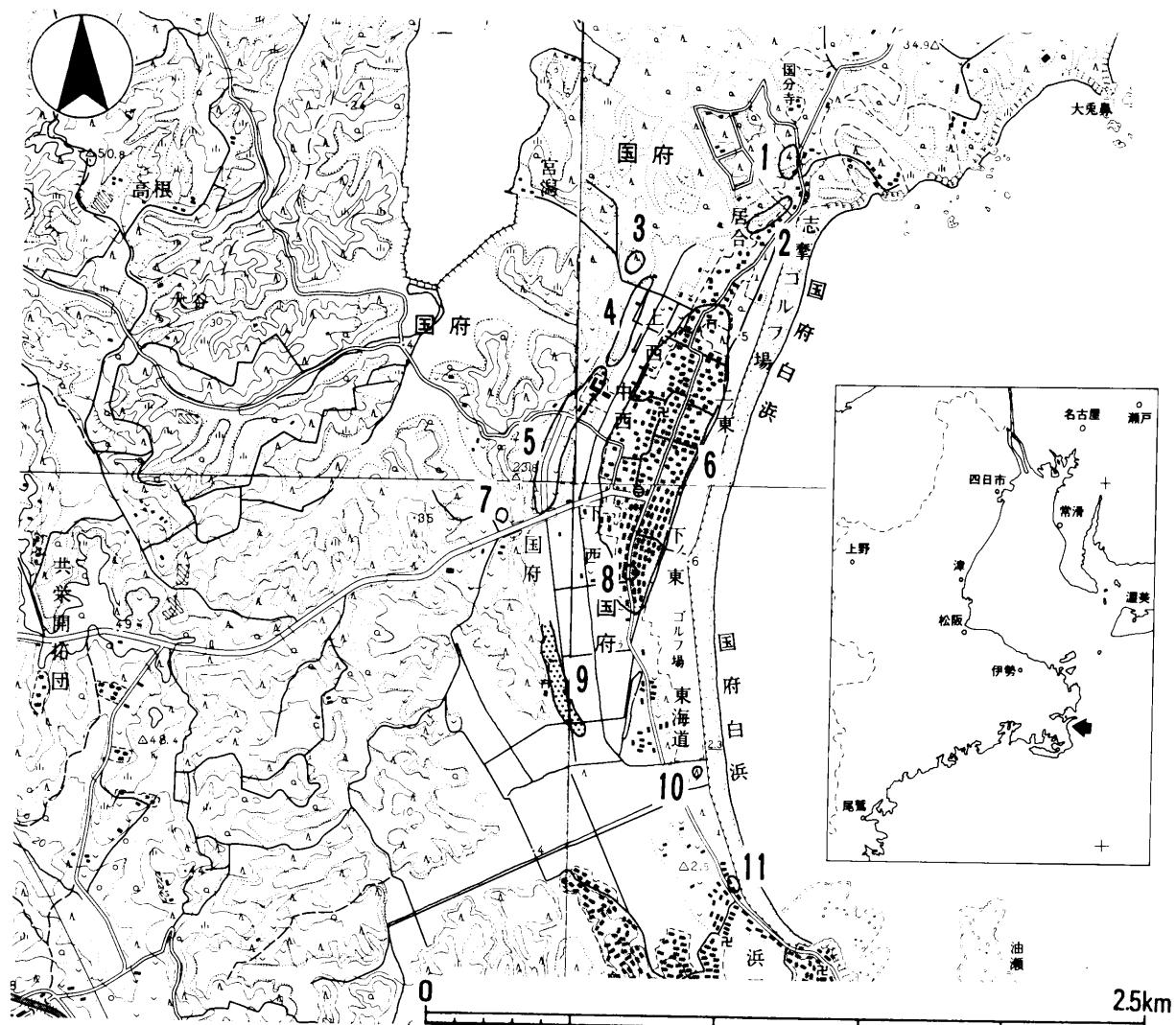


Fig. 2 遺跡位置図 (scale = 1/25,000) (国土地理院発行 1/25,000『浜島』、『磯部』、『波切』、『安乗』より)

- 1、御茶子遺跡 2、西殿遺跡 3、国府城跡 4、天神遺跡 5、殿畠遺跡 6、国府遺跡
- 7、地蔵堂経塚 8、東海道中世墓跡 9、東海道遺跡 10、和鏡出土地 11、甲賀遺跡
- ※遺跡は国府地区周辺の中世を中心とした時期に限る。

なお、A区とB区に挟まれた区域は周囲の耕作地より一段低く、常に水が溜っており、降雨の後はまさにプールと化していた。そのために十分な調査ができなかった。ただ、バックフォーで最深1mまで掘り込んだところ、遺物はほとんど認められなかった。

II. 地理的・歴史的環境

東海道遺跡は志摩半島の端、三重県志摩郡阿児町国府字東海道・一色に所在する。巨視的には安乗岬と志島城ノ崎を2頂点とした内湾部の、平野最奥部にあたるところに位置する。遺跡は東海道集落の北西、南東方向に派生する尾根の東裾部に広がってお

り、海岸まで500m足らずである。

現況は海拔1m弱の低地である。一帯は田畠地となっているが耕作土は砂質で、貝殻が多く散布している。西暦1900年前後の地形図では調査区南端のD区付近から東に沼池状のものがあり、この付近が湿地帯であったことを物語っている(Fig. 1)。当地の地形を見るならば、この沼池は以前潟湖(ラグーン)であったものが海岸砂丘の形成が進む中で次第に小さくなっていたものと考えられる。したがって、東海道遺跡は丘陵と現況の沼地に挟まれた最大幅約250mの狭い地帯に形成された遺跡なのであり、立地的には水気の多い、極めて不安定な環境であったものと考えられる。

さて、ではこのような環境下にあったと考えられ

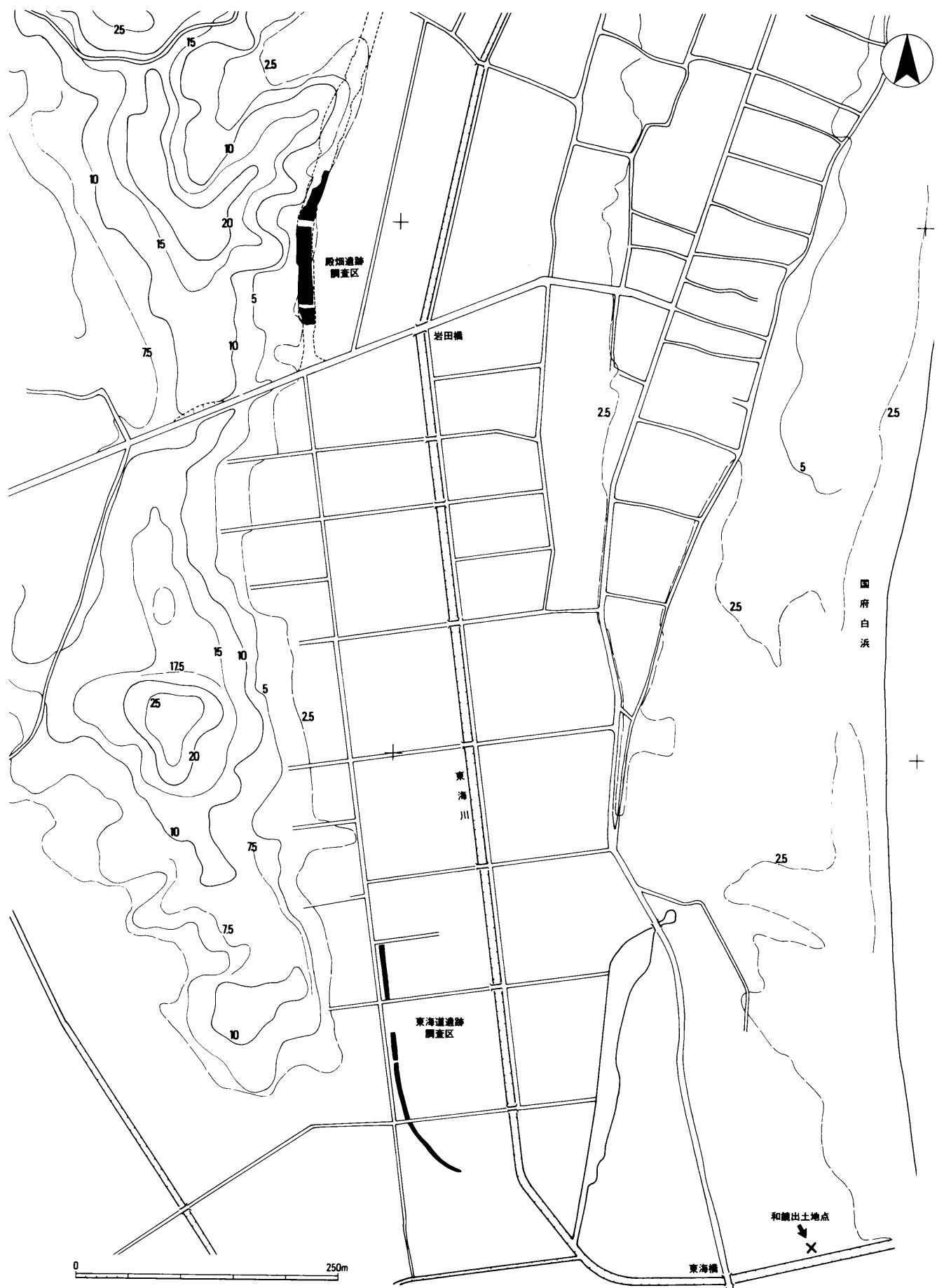


Fig. 3 遺跡周辺地形図 (scale = $1/5,000$) 阿児町都市計画図(1976)を改変)

る東海道遺跡とその周辺に認められる中世の遺跡について、概観してみよう。

今回調査を行った東海道遺跡の他に、国府地区内ではすでに殿畠遺跡、天神遺跡の2ヶ所で調査が行われている。殿畠遺跡では建物跡、土塙、溝など居住地としての性格が強い遺構が検出されており⁽¹⁾、天神遺跡でもピット群など⁽²⁾の存在から同様な機能が想定されるのである。両者のエレベーションを見ると、共に標高2m前後の山裾に立地していることがわかる。前者は基本土層が砂層であるが、後者は砂質土系である。両者のエレベーションを比較すると、天神遺跡の方がやや低いのであるが、砂堆の形成が良好な国府の中心集落地を東に控えているため、基盤がより安定しているものと思われる。

のことからも集落は丘陵の裾に帶状に形成するか、ないしは国府の砂堆の上に形成せざるを得ない状況にあったものと考えられ、その間に狭まれた現況での耕作地は当時でも居住に適さなかったものと思われる。Fig. 2は国府海岸平野を中心に、現在の段階で認識されている歴史時代の遺跡を表わしたものである。山裾部と砂堆部の2地区に大きく分かれて遺跡が立地している傾向にあることがわかる。要するに、湿地帯をとり開むようにして山裾と旧沿岸洲上に居住地が求められているのである。したがって、そのような場所で、現在遺跡とされていないところについても新たに発見されることが考えられるため、十分な注意を要する。

これらの居住地と考えられる地域のやや南方には東海道中世墓（8）、甲賀遺跡（11）などがある。前者では頭蓋骨10体分の他鏡が、後者では北宋銭を中心にして235枚の錢貨が出土している⁽³⁾。この他に、東海川の河口付近で和鏡が採集されている（Fig. 3）。和鏡（Fig. 4）は外区を圈線で画し、下方に洲浜を、上方に藤か何かを表わしている。中央の鳥は鳳凰であろうか⁽⁴⁾。

これらの遺跡は旧沿岸洲上の標高がやや低い所にあり、潟湖と外海とが接する地点により近い。このことと出土遺物の性格を考えると、これらの遺跡が立地するあたりに墓域が選定されていた可能性が高い。

以上、大ざっぱに国府地区の地理的・歴史的な環

境を追ってみた。遺跡の立地と内容を考えてみると、国府地区の平野部は居住域・耕作域・墓域が地理的な制約の中でかなり有機的に占地されていたものと考えられる。東海道遺跡はこの国府地区の中で、より耕作域的なあり方を示すものであるといえよう。

（注）

- (1) 新田洋『殿畠遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告42 三重県教育委員会（1980年）
- (2) 中村信裕・伊藤久嗣『天神遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告66 三重県教育委員会（1984年）
- (3) 三重県教育委員会編『鳥羽・志摩地区遺跡地図』三重県埋蔵文化財調査報告1（1968年）
- (4) 保坂三郎『和鏡』人文書院（1973年）を参考にした。なお、和鏡の掲載にあたっては、国府漁業協同組合出口昭治氏の快諾を得た。

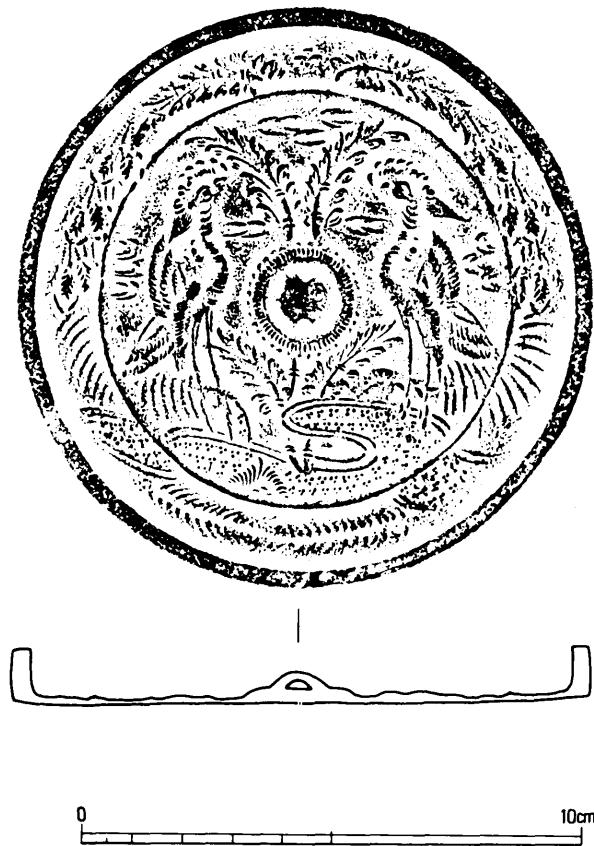


Fig. 4 東海道地区表採和鏡拓影 (scale = 1/3)

III. 調査の成果 —層位と遺構—

1. 基本層序

今回調査を行った地点は海岸に近いこともあってか、基本的に砂で構成された層位が認められる。

確認した土層のうち、最下となるのは黄色砂である。この層はD区北部での標高が最も高く、海拔0.1mを測るが、そこから南北へは次第に下降し、C区北部で海拔-0.4m、D区中央部で海拔0mとなる。それより南及び北では湧水のため確認できなかった。

黄色砂層の上には暗褐色の細砂層が堆積する。検出した遺構の多くはこの層で確認した。C区南部での標高が最も高く、海拔0.4mを測るが、黄色砂層と同様、そこから南北へは次第に下降し、A区北端では海拔-0.4mから0.2m、D区南端では海拔-0.2mとなっている。土質はA区およびD区南部では比較的硬質で粘土を含んだシルト質となっているが、C区ではそのような傾向は認められなかった。

C区北部からB区南部にかけては暗褐色細砂層の上に褐色細砂層が堆積していた。B区溝SD1、土塙群、C区溝SD1・2などはこの層で検出した。C区溝SD11の上層埋土となる層であるため、暗褐色細砂層とは時期的に異なるものであることは明らかである。しかし、後述するように全体の傾向として出土する遺物が少ないために、層位の時期差を明確にすることはできない。また、この層はB区中央部以北は攪乱によって削られており、それより北側ではどの範囲にまで広がる層なのかは確認できなかった。A区やD区においてもこれに相当する層は確認されなかった。あるいは、北部より

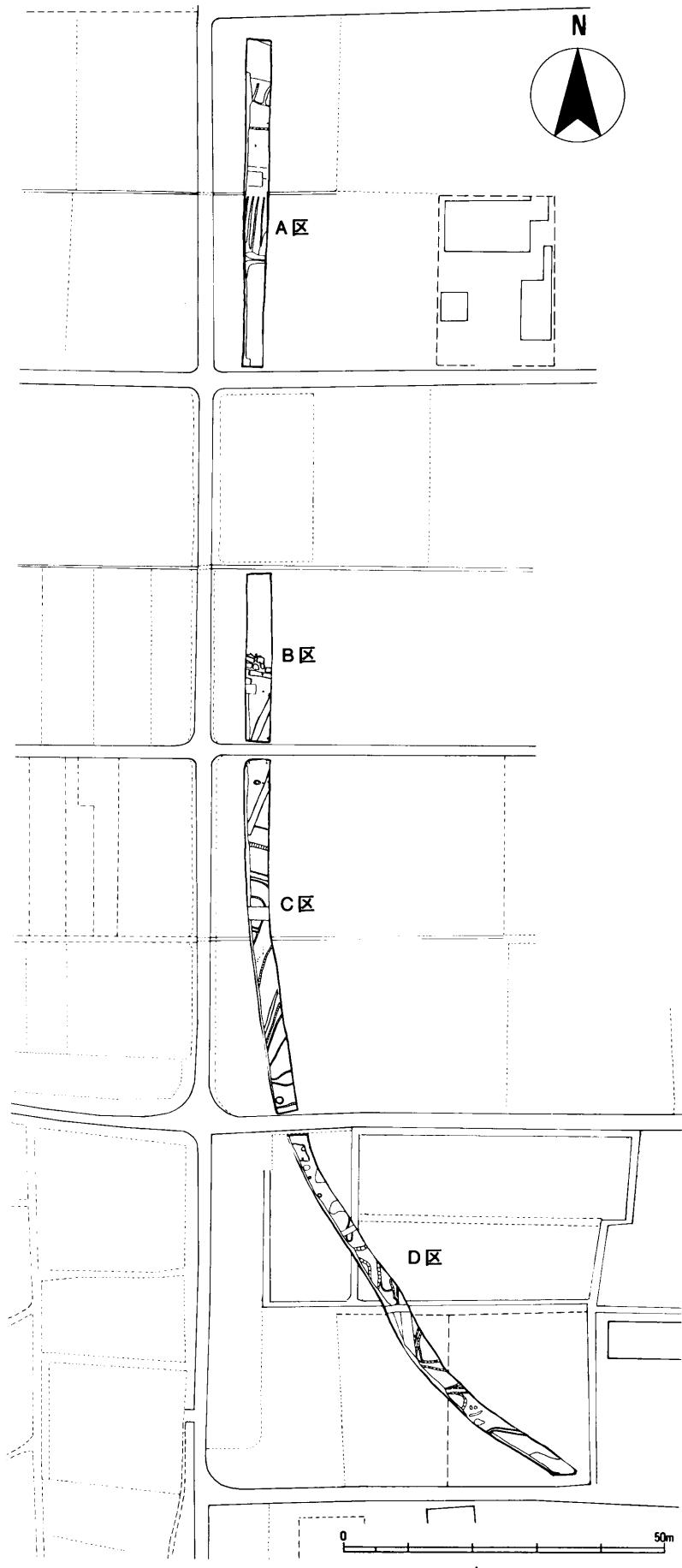


Fig. 5 調査区位置図 (scale = 1/1,000)

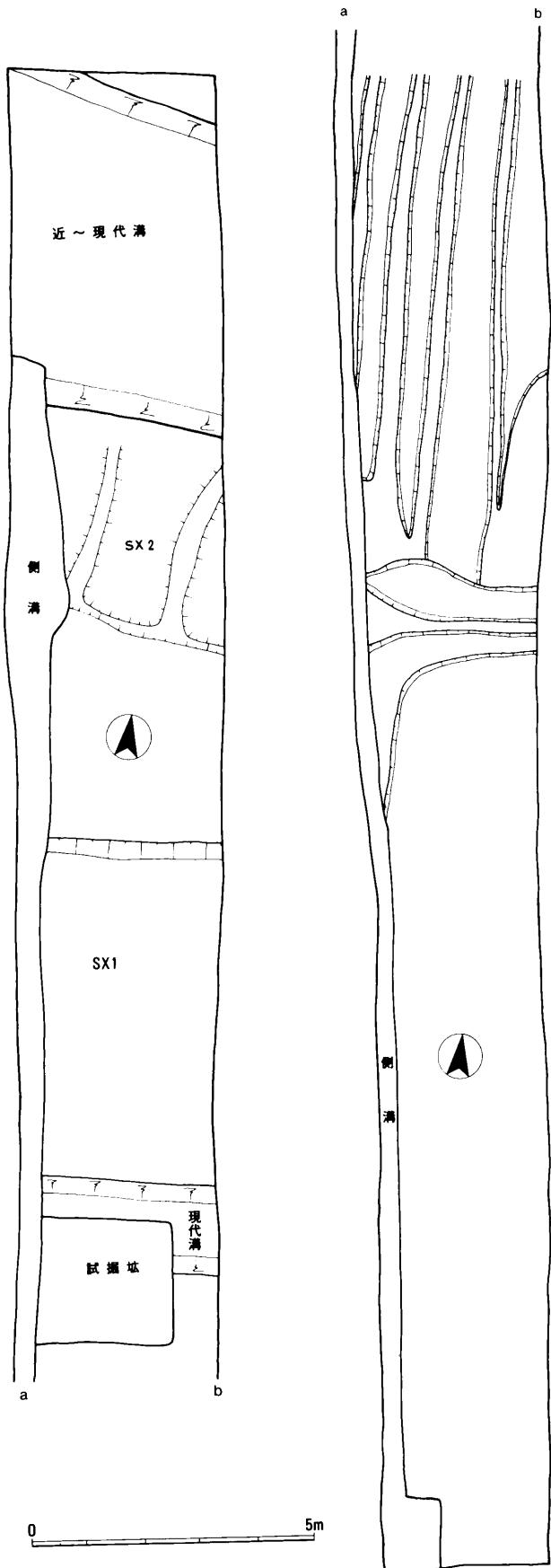


Fig. 6 A区平面図 (scale = 1/120)

北側に、褐色砂層が堆積する以前にC区落ち込み状の地形があつてそこに堆積したものかも知れない。

なお、この土層の存在するB、C区では畠状の遺構をその上部で検出しており、さらにその上には茶灰色砂が堆積している。

上述の土層は自然堆積によるものと考えられるが、調査区内各所において比較的新しい人為的な堆積と思われる層が認められている。特にA区、B区北半、D区南半において著しい。このうちD区南半のものはFig. 1に示した地形図に表されている沼地状のものの埋めたてに関わるものかも知れない。

以下、上記の基本層位をもとに、各区の層位と遺構を述べてゆくことにする。

2. A区の層位と遺構

A区は前述のように近年の攪乱が激しかったため、層位・遺構共に不安定であった。

基盤層は硬質の暗褐色砂質シルトである。その中には灰色砂がブロック状に含まれており、特に北半部分で顕著であった。なお、この面では北部にて形状が不定形な落ち込みが認められ(S X 2)、その上層は淡褐色系の砂で水平な互層を形成している。したがって、この層は水に浸った状態で堆積したものと考えられる。

淡褐色系砂層の上には、淡茶灰色系の砂層が堆積していた。中央部にて検出した平行して走る溝群はこの面にて確認できた。溝の埋土からは陶器の捏鉢や土師器の鍋の細片が出土するのみで時期の判定は困難である。ただ、この層に対応すると考えられる30(Fig. 7-A区)の層からは残存度の良い土師器鍋(Fig. 18-16)が出土しており、溝状遺構は、遡っても16世紀前半に形成されたものであることを示している。

以上が近世以前の遺構と層位であるが、A区では溝S D 1、2、落ち込みS X 1、などの遺構が近～現代に掘削されている。その年代は21(Fig. 7-A区)の層から「大正11年」の刻印がある1銭銅貨(P L . 8)が出土していることから近代以降と思われる。ただ、落ち込みS X 1では混入であるものの比較的多くの土師器、陶器類が含まれていた。

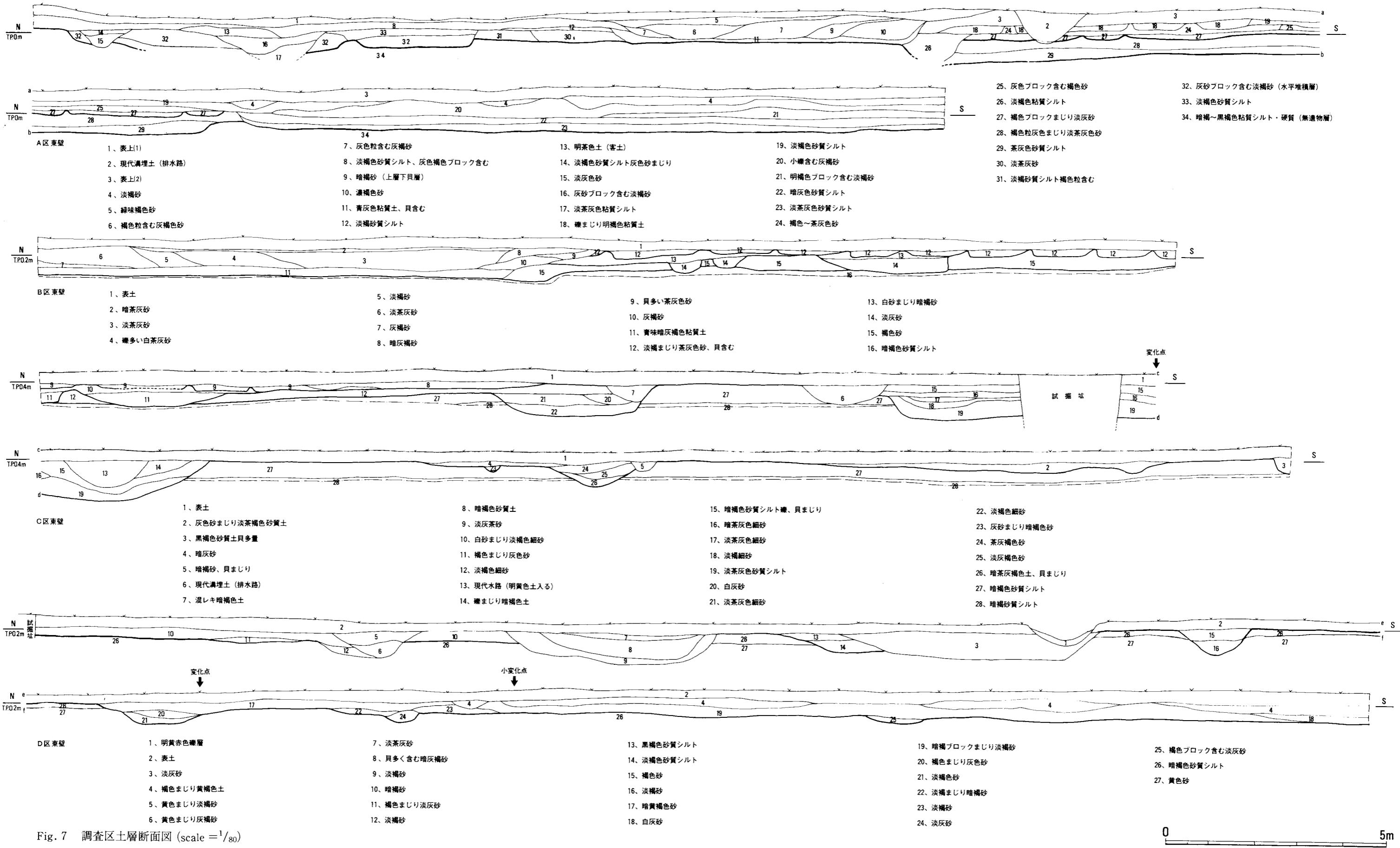


Fig. 7 調査区土層断面図 (scale = 1/80)

3. B区の層位と遺構

B区では、南半部分で基本層位がそのまま認められたが、北半部分は近～現代に行われた、無遺物層にまで達する攪乱 (Fig. 7 - B区 2～11の層) によって乱されていた。

B区南半では前述のように基盤層である暗褐色砂の上に褐色砂の堆積が認められ、さらに上に白砂まじりの暗褐色砂が認められた。したがって、遺構面としては3面の存在を想定したが、実際には暗褐色砂層上に遺構はなく、後2者の層上において遺構が認められた。

褐色砂層面（第1面下）では、性格不明の土塙群、南北方向の溝、ピット等を検出した (Fig. 8 - 右)。埋土は前2者が淡灰砂で後者が暗褐色系の砂である。性格不明土塙群は、合計9基検出した。壁がほぼ直立するものが大部分であるが、2基ほどはながらに傾斜するものである。溝状のものも含まれている。溝SD1はN14°20'E方向の直線的なもので断面逆台形を呈する。C区でこの溝の続きを認められる。ピットはまばらに数個認められるものの、一群の建物としてはまとまらない。

白砂まじり暗褐色砂層面（第1面上）では、1.4～1.5m間隔で東西方向に走る隆起遺構を検出した。 (Fig. 8 - 左) この一単位は北側法面より南側法面の方が強い傾斜となっていた。性格としては畑地の畝などが考えられるのではないか。埋土は第1面下の溝SD1の埋土より褐色味を帯びるが、基本的に同じ灰色砂である。

これらの遺構中からは時期を決定付けられるようなまとまった土器は出土していない。時期の特定は難しいが近～現代の遺物は含まず常滑窯IV～V^(註)期の遺物の細片が認められることから中世後期を越るものではないであろう。

4. C区の層位と遺構

C区は攪乱もなく、基本層位が最もよく確認された地区であった。前述の褐色細砂層は溝SD11以北に認められる。この層を間層として、合計3面の遺構面が存在しているが、この層が認められない溝SD11以南での遺構面細分は不可能であるため、その部分については第2遺構面とともに一括でとり上

げることとした。

第2遺構面では、湾曲して走る、幅2.5m前後の溝（溝SD9・10・11）、と、直線的に走る溝（溝SD5・SD6）、不定形な落ち込み（落ち込みS

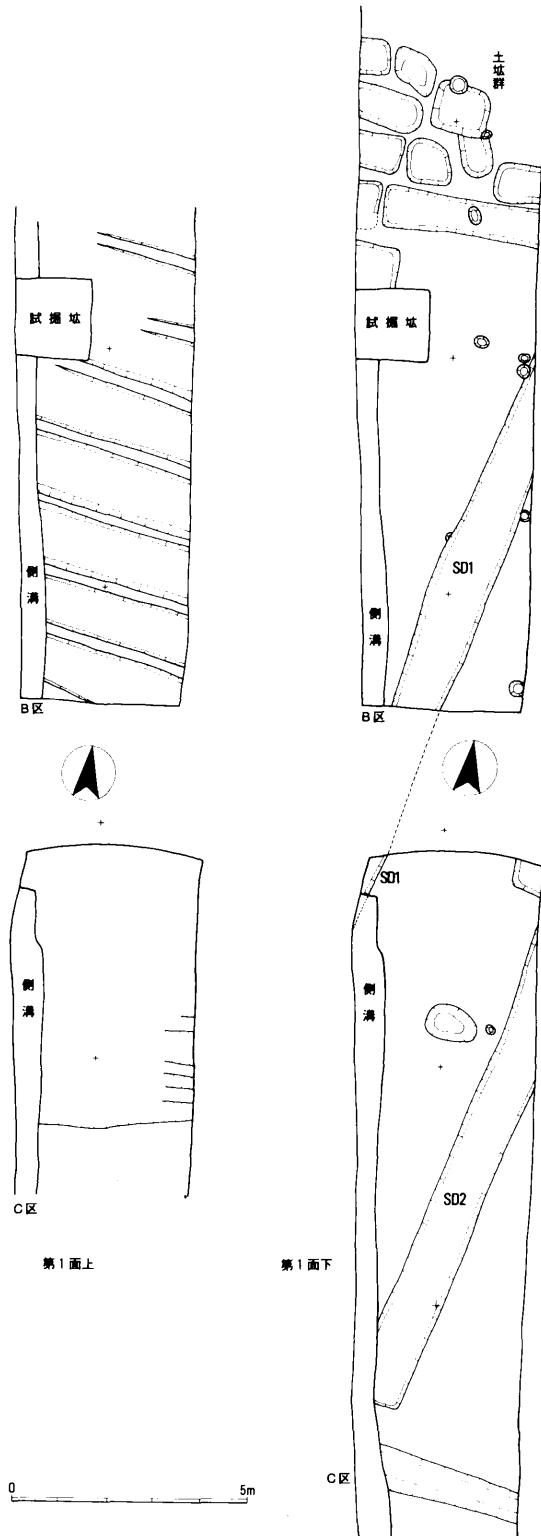


Fig. 8 B区およびC区北部第1面(上、下)
平面図 (scale = 1/160)

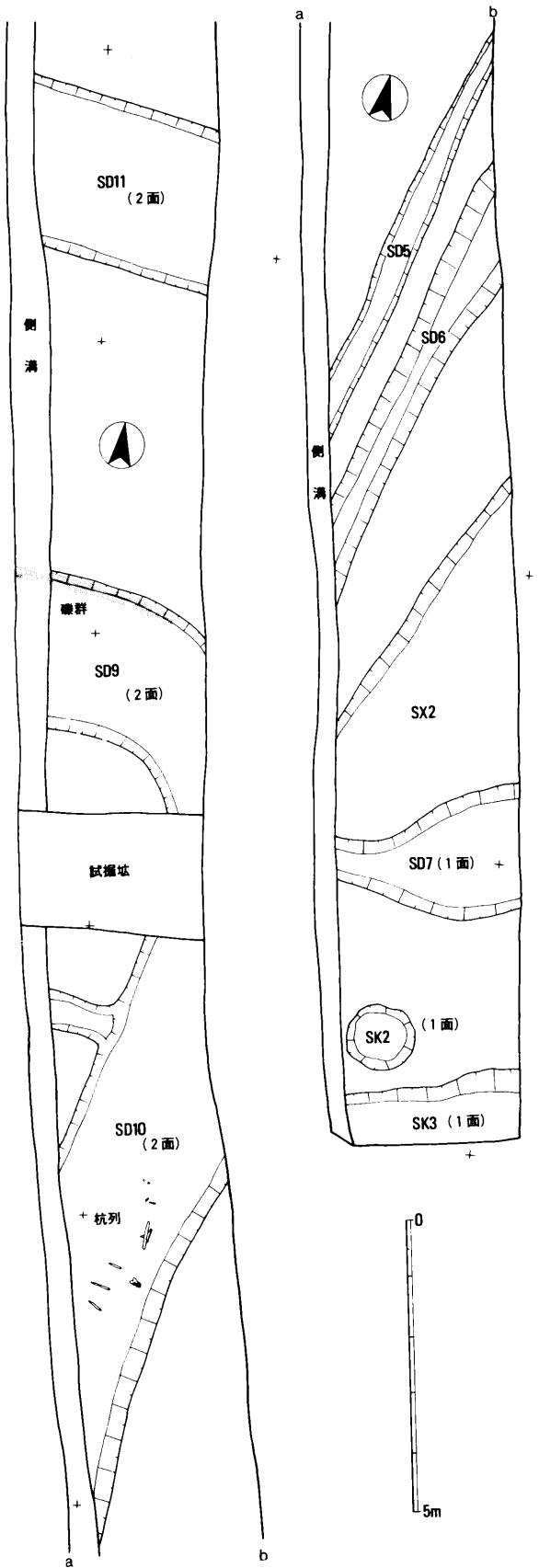


Fig. 9 C区第1面・第2面 平面図 (scale = 1/120)

X 2・S D 7・S K 3)、土塙(土塙S K 2)を検出した。ただし後3者は、埋土や形態の点から第2遺構面とするよりは溝S D 5、6が第1遺構面下面、その他は近～現代の搅乱遺構である可能性が大きい。

第2遺構面は暗褐色砂層上で検出された(Fig. 9)。溝S D 9と溝S D 10は試掘塙によって分断されているが、一続きのものと考えられ、溝内埋土もほぼ対応している。S D 9の溝底の北法面側(Fig. 9のS D 9スクリーントーン部分)には礫群が認められたが基盤層が緩いことと湧水のために崩れてしまつた。ただ、面を揃えていたり整然と並べられていたような状況は認められなかった。Fig. 13・14に示した「円石状石製品」(1～3)や陶器・鉢(Fig. 19-80、81)はこの礫群中から出土した。溝S D 10は西側に小溝がとり付いている。また、溝内には立木の根(PWI)が認められ、そのやや西側では杭列が検出された(Fig. 10)。杭列は溝S D 10の埋土内に打ち込まれており、一部基盤層の黄色砂層まで達しているものもある。杭は全体に垂直からやや東へ傾き、w 4から両側へ円弧状に広がっているため、西側からの水流を意識したものではないかと考えられる。また、w 4の杭の上部には横板(w 5)が組まれているが、実際にこの部分のみなのかw 3やw 6の方向にまで存在していたものが腐触したり流出したもののかは分からぬ。なお、溝S D 10には杭列を打ち込む以前の埋土中に陶器・天目茶碗(Fig. 10のP 1、Fig. 19-82)があることから、杭列構築の時期は16世紀後半^(註)を遡るものでない。

溝S D 5・6は、埋土中に貝殻を多く含んでいるものである。溝S D 6の断面はV字形である。

第1遺構面下面是褐色細砂層上で検出された(Fig. 8-右)。主な遺構には東西方向に走る溝(溝S D 1・2)、土塙、ピット等がある。溝S D 2は調査区北部を縦断する形で検出された。南側で方形に収められているが溝そのものはB区で検出された溝S D 1とほぼ並行して走っている。埋土は白灰色系の砂が一度に埋まった状況で、上層には淡褐色系の砂が薄く堆積しているがレンズ状にはならず、平坦に堆積していた。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平らである。これらの状況はB区の溝S D 1とほぼ共

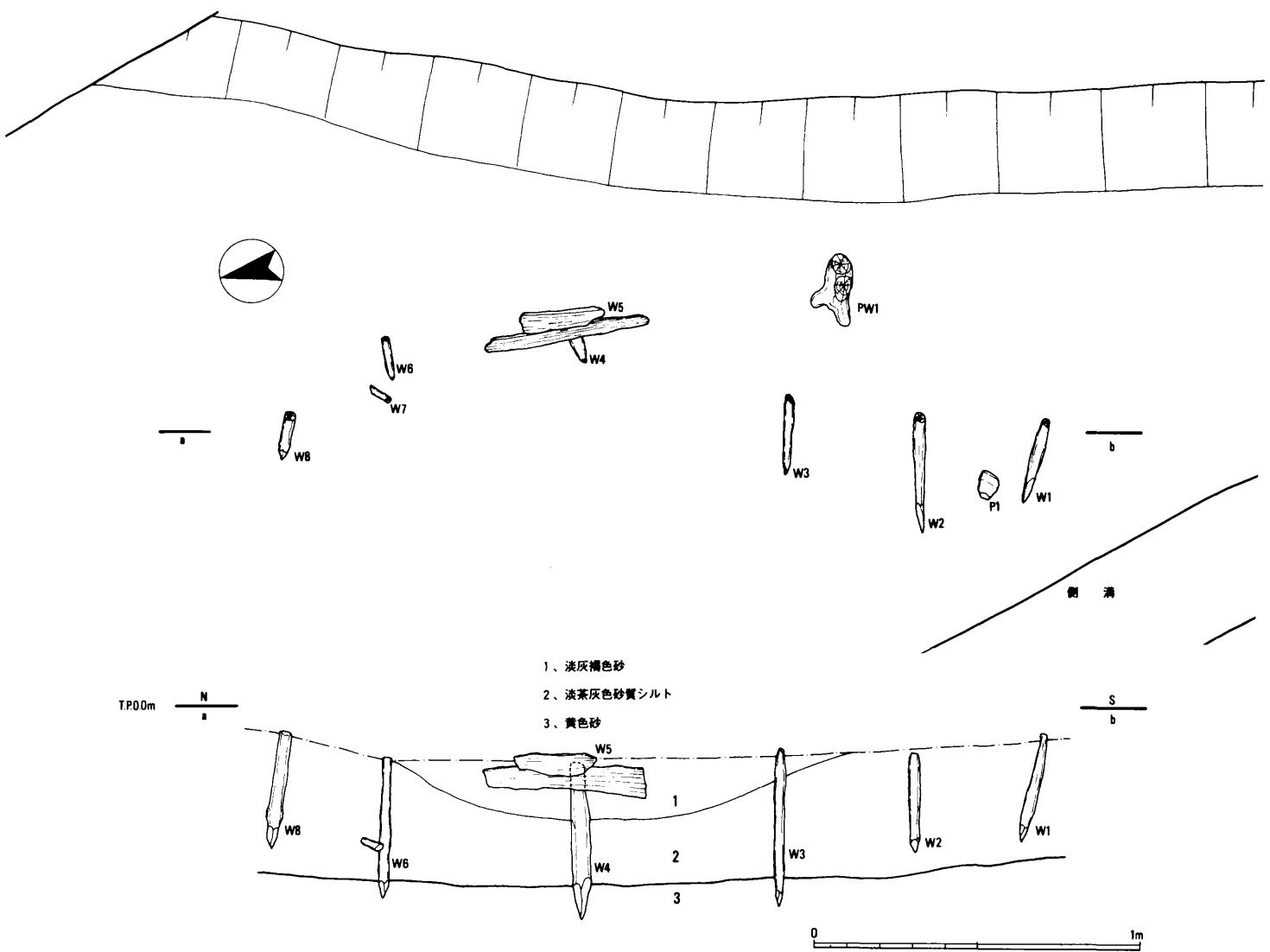


Fig.10 C区溝 S D 10 杭列検出状況平面・立面図 (scale = $1/20$)

通するもので、両者は同時期のものと見て差し支えないものと思われる。遺物は少量で、時期の特定はできない。

第1遺構面上面は褐色細砂層上に薄く堆積する淡褐色系の砂層面で検出した (Fig. 8-左)。ここではB区で検出した隆起遺構と同様な遺構を検出した。隆起遺構はB区のものは間隔が狭いため、隆起遺構とするよりは小溝状遺構とするべきかも知れない。方向は東西方向と考えられるが、西側は削平のために不明であった。所属時期も出土土器が細片のため不明である。

5. D区の層位と遺構

D区 (Fig.11) は面的に受けた削平はあまりなかったものの、近～現代の溝状の攪乱が多く認められ

た。その中で、中央やや北寄りで検出した溝状遺構 (S D 1) は、出土遺物から近～現代のものと考えられるのであるが、中世の陶器、土師器片のほか、獸骨や貝殻を多く含んでいた。これは、他の遺構からはあまり良好な資料が得られなかつたのと対象的で、当遺跡の性格を考える上でも興味深い。

攪乱は溝状のものであったことが幸いしてD区の層位は比較的安定していた。溝 S D 3 以北では耕作土直下に暗褐色細砂 (基盤層) が認められる。ただ耕作土も同色、同質のものであるため、両者の識別は困難であった。遺構は他の地区と同じく、この層位面にて検出した。なお、暗褐色細砂層は溝 S D 3 以南ではその上に間層として2～3層認められ、なだらかに下降している。溝 S D 3 以南ではやや黒みを帯びて粘質が強くなっている。なお、B・C区で

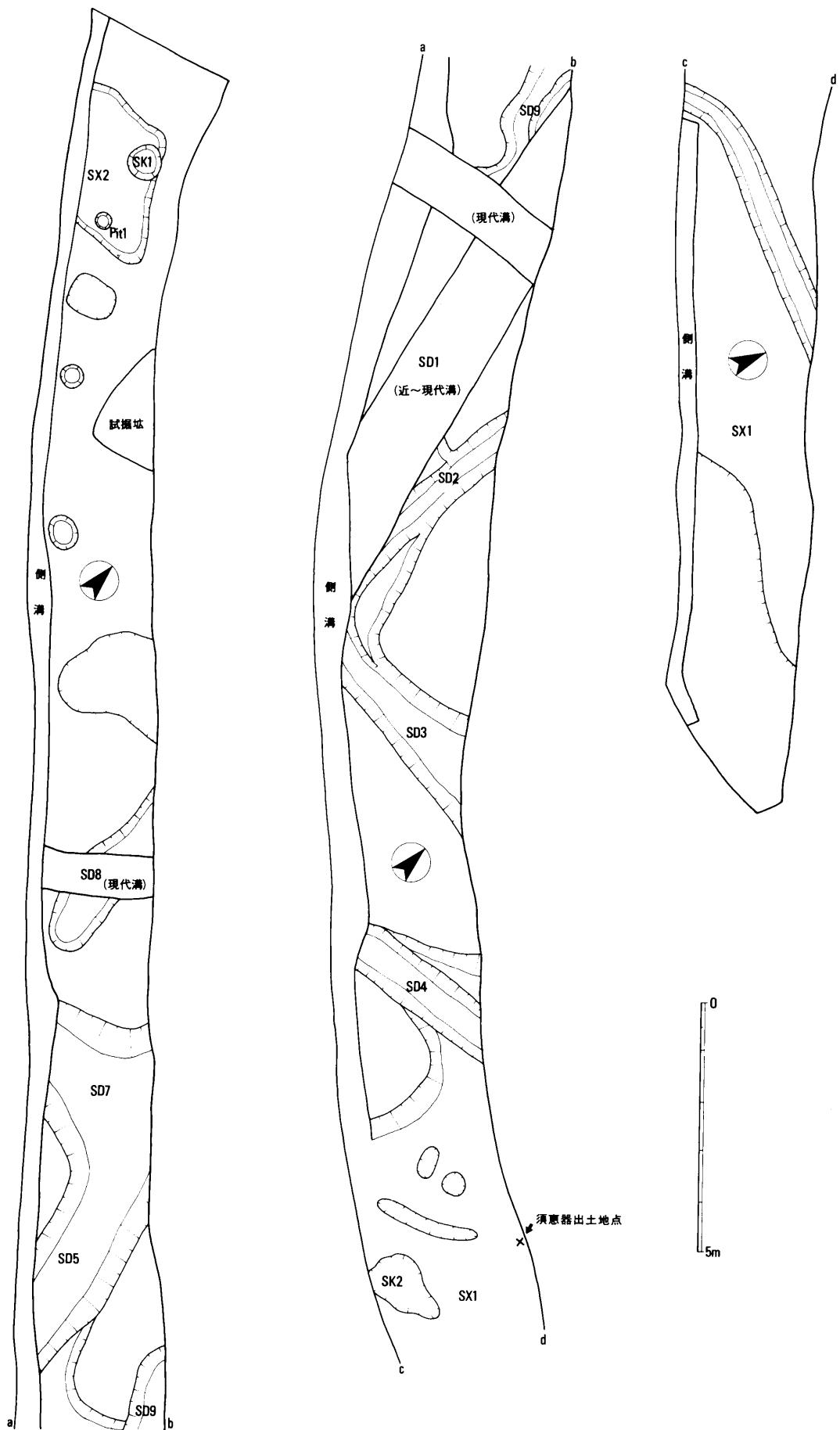


Fig.11 D区平面図 (scale = 1/120)

認められた淡褐～褐色砂は認められなかった。

このような層位的条件のため、D区の遺構は層位的には細分できなかった。検出遺構には土塙、溝、ピットなどがある。この中で、比較的良好な埋土で中世以前と考えられるのは土塙S K 1、溝S D 2・3・4・9のみで、その他については比較的新しい時期に掘削されたものと思われる。例えば溝S D 7では泥土の中に獸骨や貝殻が多く認められ、新しい時期の遺物は認められないものの、溝S D 1と似た状況を呈している。

溝S D 2と溝S D 3はほぼ直角に交わるものであるが、埋土は溝S D 2が褐色系の砂であるものに対して、溝S D 3はやや濃い褐色で、砂粒も少し粗いものである。出土土器は細片にとどまるため、両者が時期的に並存するかどうかは不確定である。少ない遺物から判断すれば15～16世紀にともに収まるものと考えられる。

溝S D 9は東側の肩を溝S D 1によって切られているため、形態等は不確定であるが、西側の肩の形状などから溝状を呈するものと判断した。遺物は少量であるが、土師器細片とともに龍泉窯系の青磁碗(Fig.19-85)が出土している。

その他には時期を決定付ける良好な遺構は認められなかつたが落ち込みS X 1について少し触れておきたい。これは溝S D 4以南から緩やかに南に向かって傾斜するもので、底面にはやや粗い砂質の埋土をもつた小溝や不定形な土塙状の遺構が認められる。この遺構そのものはⅡの項で触れた沼池に関し

たものと思われるのであるが、その底面に接して須恵器の平瓶(Fig.16-3)が出土している(Fig.11参照)。落ち込みS X 1の時期を示すものではなく、混入物と考えられるものであるが型式的には陶邑田辺昭三編年のTK 217^(註)に並行するものであり、当地の性格を考える上で興味深い。

6. 遺構のまとめ

A～D区に認められた遺構を総合すると、ピット、土塙などの遺構が少なく、溝が圧倒的に多い、という傾向が窺われる。Iの項で触れたように、当地の立地は以前より低湿地であったものと考えられ、土壤が砂質でもろいため、居住空間としては極めて不適であったものと想定される。調査区内に限って言えば、C区溝S D 9・10の礫群・杭列から水利施設のあったことが想定され、A・B・C区に小溝・隆起遺構が認められることから、一種の食糧生産の場ではなかつたかと思われる。これは、遺構に伴つた遺物が極めて少ないとからも想定されよう。

(註)

遺構の時期を決定するための土器編年は、主に以下の文献を参考とした。

須恵器…田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ研究論集第10号 (1966年)

中世の土師器…新田洋「平安時代～中世における煮沸用具—「伊勢型」鍋—に関する若干の観察」『三重考古学研究』I (1985年)

中世の瀬戸・美濃窯陶器…藤澤良祐「瀬戸大窯の編年的研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館 (1986年)

中世の常滑窯陶器…赤羽一郎「常滑焼—中世窯の様相—」 考古学ライブラリー-23 ニューサイエンス社 (1984年)

IV. 調査の成果 —出土遺物—

今回の調査によって出土した遺物はコンテナ箱に18箱を数えた。内訳は土器が大部分で若干の金属製品、石製品、木製品がある。全体的には少量で、完全なものもほとんどない。

1. 金属製品

金属製品には鉄製品と銅製品がある。鉄製品には釘の他に用途不明製品があるが、時期的には近～現代のものと思われ、図示していない。銅製品には貨幣があり、いわゆる渡来銭の他に、大正期の1銭銅貨（前述 PL. 8）がある。

貨幣

Fig.12に示した拓影は、いわゆる渡来銭である。1は開元通寶（唐・武徳4年〔621年〕初鑄）で、裏面には「一」の記号がある。D区土塙S K 1から出土した。2は嘉祐元寶（北宋・嘉祐元年〔1056年〕初鑄）である。A区の攪乱土より出土した。3は元豊通寶（北宋・元豊元年〔1078年〕初鑄）である。D区北部の表土中より出土した。4は聖宋元寶（北

宋・建中靖国元年〔1101年〕初鑄）、5は宣和通寶（北宋・宣和元年〔1119年〕初鑄）である。両者ともB区の表土中から出土した。

この5枚の貨幣は、文字の刻み具合、金属の質、などの点から、1と5は実際に中国で作られた可能性が大きいが、それ以外については私鑄錢の可能性が大きい。

2. 石製品

石製品には縄文時代を中心に出土例のある、凹石に類似した形状のもの3点と、砥石1点がある。前者は後述するように所属時期には問題があるものの形態的には凹石と極めて類似するものであるため、本報告ではとりあえず「凹石状石製品」と呼称する。

凹石状石製品（Fig.13-1・2、Fig.14-3）

全てC区溝S D 9の礫群中から出土したものである。1の原材は偏平な川原石で、その中央部に敲打痕が認められる。実測図左側の面では窪みが深く円形に近いのに対し、実測図右側の面では窪みは浅く、不定形である。側面には2ヶ所に敲打痕があるがこれは中央をはさんだ対面にあるものではない。岩質は小礫を含んだ砂岩で重さ1,110 gである。2の原材は縦長の川原石で、対になる幅の広い方の面の中央部分に敲打痕が認められる。実測図左側の面では窪みが深くほぼ円形を呈するのに対し、右側の面ではやや浅く、不定形である。側面は短辺の広い方（図では下側）一面に敲打痕が認められる。岩質はやや粗い砂岩で重さは487 gである。3は六面体状の川原石を原材とし、最も面積の広い対になる2面に敲打痕が認められる。敲打痕は中心からややすれた位置にあり、実測図左側の面では窪みが深いのに対し、右側の面ではやや不定形となっており、側面との境目には別の敲打痕がある。なお、左側の面の実測図の敲打痕の下にあたる部分には研磨痕がある。実測図中央の縦断面で下になる面は人工的に作出された面と思われ、細かな剥離痕がある。岩質は緻密な泥岩質の砂岩で、重さは689 gである。

砥石（Fig.14-4）

4はA区の落ち込み1から出土した砥石片である。短辺を除く4面に強い研磨痕が見られ、そのために中央付近で折れたようで、その一方は見当らな

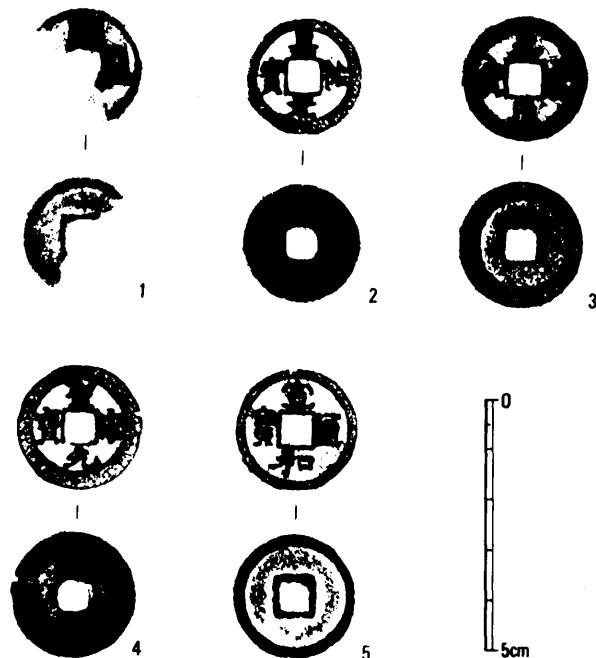
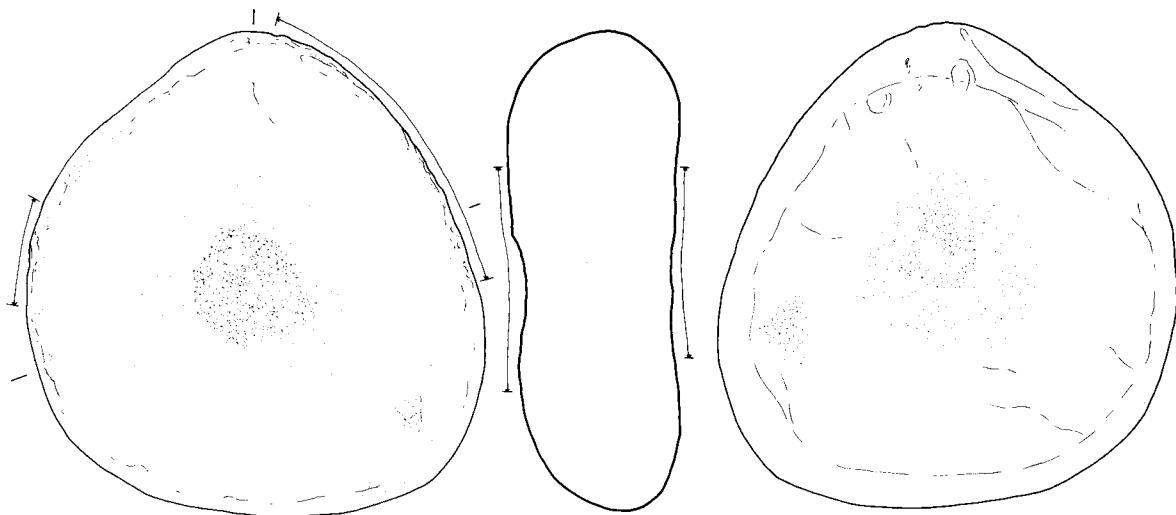
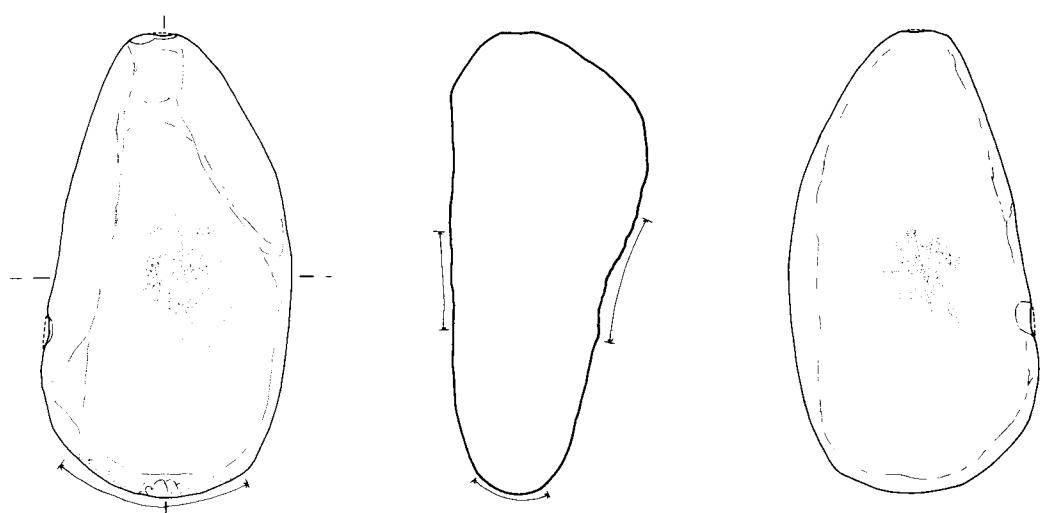
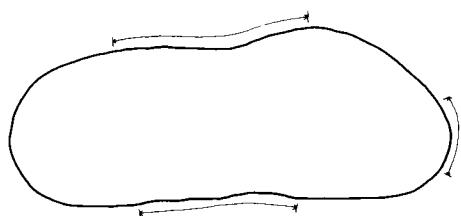


Fig.12 出土貨幣拓影 (scale = 2/3)



1



2

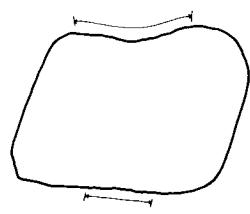


Fig.13 出土石製品実測図(1) (scale = 1/2)

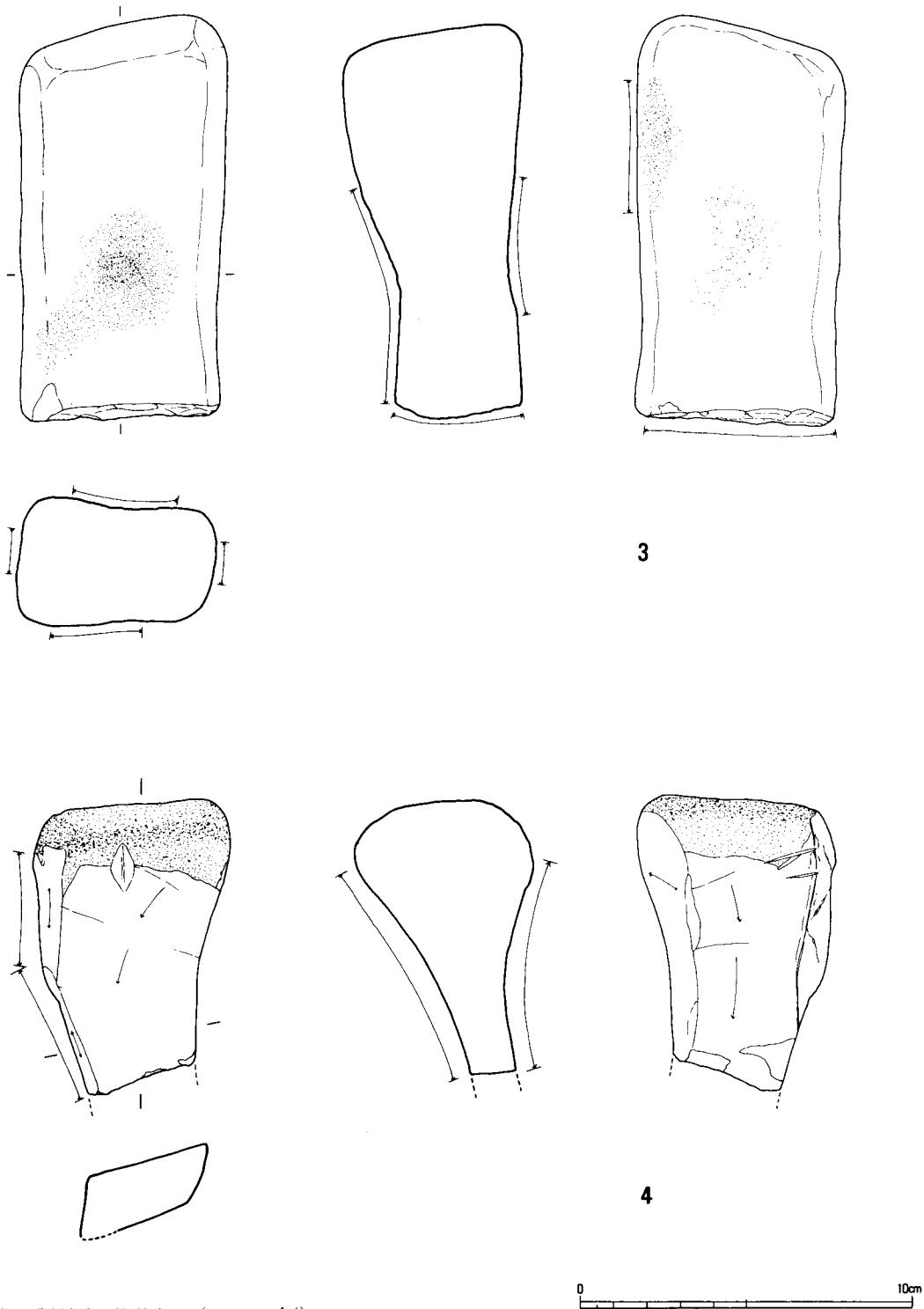


Fig. 14 出土石製品実測図(2) (scale = 1/2)

かった。研磨方向は短軸方向に行う面と長軸方向に行う面とがある。岩質は砂岩で、残存部分の重さは 269 g である。

3. 木製品

今回の調査区が低湿地の環境にあったため、植物

遺体は全調査区内で散見できた。人工的な加工痕のあるものは C 区の溝 S D 10 に打ち込まれていた杭の他、A 区の近～現代溝から下駄が出土している。

Fig. 15 は C 区溝 S D 10 出土杭の実測図である。なお、実測図に示した番号は杭列検出時の番号 (Fig. 10) と対応している。このうち、w 7 は自然木で人工的

な加工痕は認められず、W5は損傷と磨耗が激しいため図示しなかった。

杭は直径3cmに満たないものが中心であるが板材(W5)と組まれていたW4のみが直径3.5~4.0cmと太いものである。使用していた木材は、W6とW8が松と思われるが、その他については不明である。

4. 土器類

土器類は出土遺物の中でも最も多く、コンテナ箱で16箱を数える。しかし、多くが遺構に伴わないので

伴っても細片で他器種との時期的な並行関係、共伴関係については追求を行いにくい。そのため、各遺構毎の記述ではなく、器種毎に一括して記述を行うこととする。以下、出土土器に見る傾向を見てゆく。詳細は出土土器観察表（Tab. 1~3）を参照していただきたい。

中世以前の土器類 (Fig. 16)

中世以前の土器として、土師器・須恵器がある（Fig. 16）。土師器には甕(1)と甌(2)があり、須恵器には平瓶(3)と甕(4)がある。平瓶は前述のように陶邑

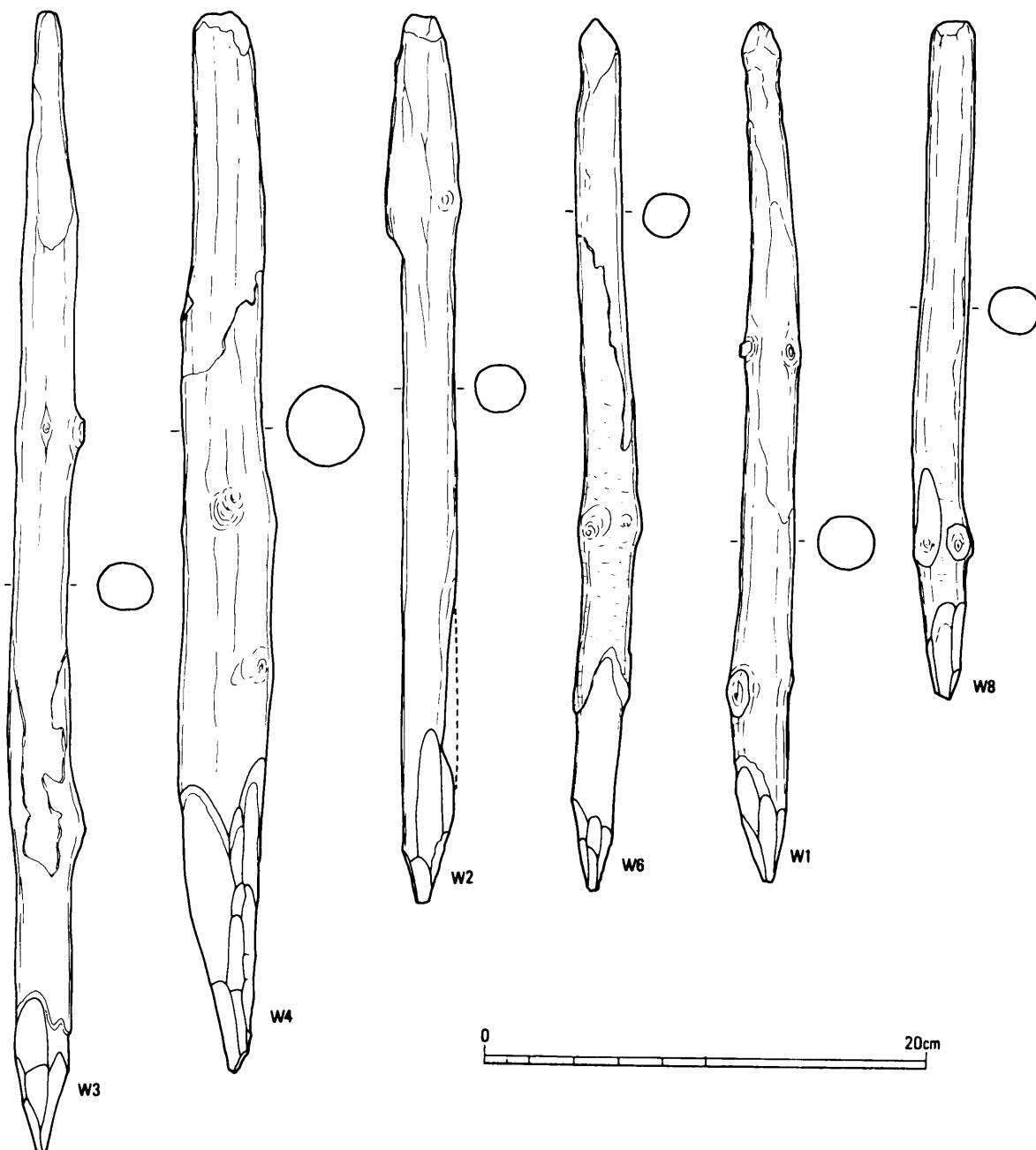


Fig. 15 C区溝S D 10 出土杭実測図 (scale = 1/3)

TK 217 並行のものである。土師器もほぼ同じ時期のものであろうか。その他には凹面に布目痕のある平瓦(5)がある。時期的には中世のものかも知れない。

中世以降の土器類 (Fig. 18~20)

土師器

土師器⁽¹⁾では皿、茶釜、羽釜、鍋、がある。鍋では新田洋氏の分類⁽²⁾による5類の範疇に含まれるもの(6~8)と、6~8類の範疇に含まれるもの(9~40、41~50)がある。ここでは出土量の多い後者の土器について、筆者が多気郡勢和村・若宮遺跡の資料で行った分類⁽³⁾をもとに見てゆきたい。

この時期の鍋は口縁端部外側の面の有無によってA・Bに大別される。鍋A(41~50)、鍋B₁(12~35、38~40)、鍋B₃(9~11)があるが、鍋B₂、B₄、B₅に相当するものは当遺跡の資料中にはない。ただし、頸部が丸く、口縁部が短いもので、体部が偏平な形態を呈するもの(36・37)がある。口縁部の形態や内・外面の調整手法からは基本的に鍋Bに

含まれるものであるが、若宮遺跡に認められた資料と時期的に並行関係にあるのか、或いはやや後出する形態なのか、現状では判断しにくい。前出の新田分類で見ると8類に類似するものであるが、とりあえずここでは鍋B₆として分類しておきたい。

次に鍋A・B₁の中に認められる特徴を抽出して、今後の土器編年に備えたいと思う。鍋Aは、若宮遺跡の資料中では、鍋Bとの法量の差による共伴と考えたのである⁽⁴⁾が、東海道遺跡の資料では時間的な先後関係は層位的には確認できない。それよりも形態的な差が明瞭に認められるので、それについて分類を行っておく。

鍋Aを口縁部の形態によって分類すると、口縁部径が大きく、口縁端部の内側に折り返した部分の上面にのみ強いヨコナデを施すもの(41)、口縁端部の内側に折り返した部分の先端の両側にヨコナデを施すもの(42~44)、口縁部は短く、口縁端部の内側に折り返した部分の先端の両側にヨコナデを施す

もの(45、46)、口縁端部の内側に折り返した部分の先端がはね上っているもの(47~50)がある。

これを順に鍋A₁、A₂、A₃、A₄と仮称する⁽⁵⁾。鍋A₁は比較的厚手のもので、時期的には他の鍋Aより遅るものと考えられる。鍋A₂は折り返し部分が長いもの(42、43)と短いもの(44)とに細分が可能である。ただ、時期的な前後関係は不明と言わざるを得ない。

鍋A₃は若宮遺跡で「鍋A」と呼称したものと比較的よく似ている。ただし、頸部から体部最大径部の間に屈曲部があることから、それよりも時期的にやや遅るものと考えられる。鍋A₄は口縁部形態については端部以外は鍋A₂と似通ったものであるので、時期的には連続するものかも知れない。

鍋Aについては以上のような分類ができるが、鍋Aとしての型式

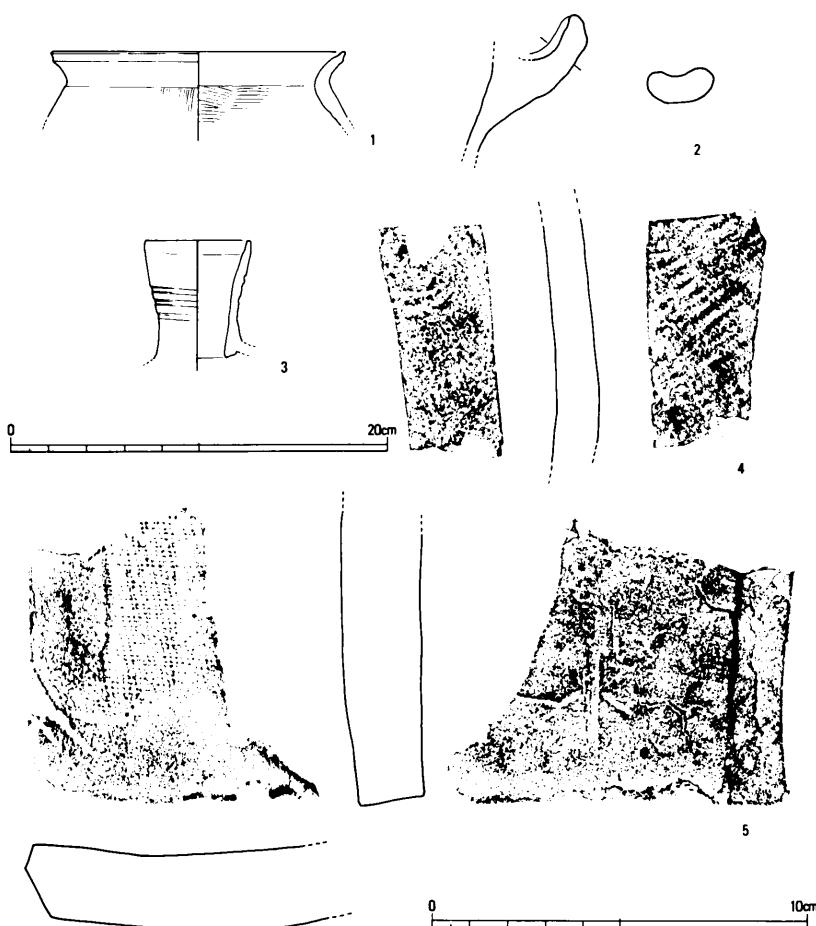


Fig. 16 出土土器実測図(1) (scale 1 ~ 3 = 1/4, 4 ~ 5 = 1/2)

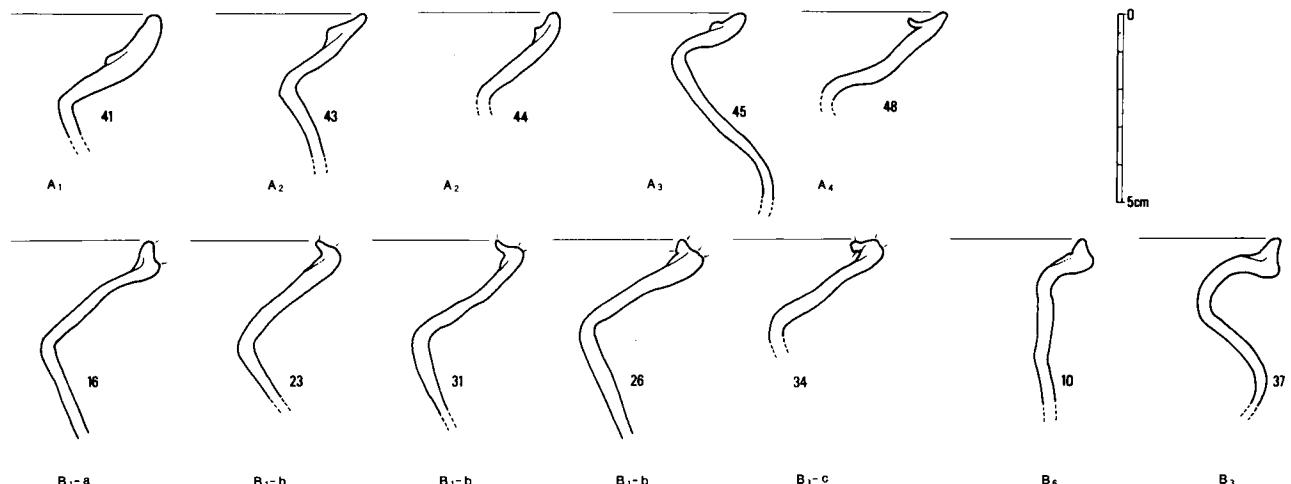


Fig. 17 鍋 A・B 分類図 (scale = 1/2) ※番号は実測図と対応する

変化を追うのは現状では困難である。しかし若宮遺跡の段階ではすでに小型のものに変化することを考えると、鍋 A₃の存在は示唆的である。

次に、鍋 B₁について見てみよう。鍋 B₁の範疇に含まれるものうち、口縁端部の整形には微妙な違いが見出せる。これを大きく分類すると、上方に突出するもの(12~16, 38, 39)、内傾するもの(17~31)、さらに折り返されるもの(32~34, 40)、となる。これを順に、鍋 B₁の a、b、c と呼称する。a は若宮遺跡にて「鍋 B₁」と呼称したものとほぼ共通する要素を持つ。その中で、13のような体部内面全体をヘラケズリするものはやや特異である。b は若宮遺跡でも認められたが、東海道遺跡のものは口縁端部全体が内傾するものであり、同一視はできない。c は鍋 B に共通して認められる口縁端部の内側へ折り返したものの上に、再度折り重なるようになっているものである。折り重なりが大きい32、34は外面にヨコナデによる面が2面存在している。

鍋 B₁におけるこのような口縁部形態の相違は、時期的な段階の差異として認識できる可能性がある。b に認められた内傾の要素の中でも、23~25、27、31などは、c に移行する過渡的な形態と考えられる。しかし、折り返し部分の中央に凹線状の窪みをもつ26などは、手法的にはこれらより複雑であり、c により近いものである。したがって、将来的には b から切り離して考える必要がある。a、b、c の前後関係については、鍋類の形態自体が口縁端部内側への折り返しが1回であること⁽⁶⁾からも、a →

b → c の順の変化が考えられる。しかし、これらがどれ程の時期差をもっているのかは今後の資料の増加を待つ他ない。

次に羽釜を見てみる。羽釜は若宮遺跡の分類の羽釜 A に属するもの(58~61)と羽釜 B に属するもの(62)がある。口縁端部は外側へ折り返されている。羽釜 A の口縁部と鋸部の形態からは58~61の順の型式的変化が想定できる。ただ、これについても厳密な時期比定は今後の課題となる。

陶器・磁器

陶器には塊、茶塊、皿、壺、甕、鉢があり、磁器には碗がある。陶器は釉の有無と種類によって灰釉(鉢、塊)、鐵釉(天目茶塊)、自然釉(壺、甕)、無釉(塊、皿)のものがある。磁器は全て緑色系の釉を施している。

鉢には灰釉のもの(80、81、71)の他、捏鉢と擂鉢があり、捏鉢は常滑窯、擂鉢は瀬戸・美濃窯のものである。壺・甕の多くが常滑窯のものであり、常滑窯製品と瀬戸・美濃窯製品を比べると前者の方が量的に多い。

陶器類のうち、編年作業が比較的まとまっている天目茶塊、捏鉢、擂鉢、壺、甕などについておおよその時期を見ると、多くが16世紀代に比定されるようである。なお、110、112は14世紀代、111は15世紀代に比定できようか⁽⁷⁾。

磁器(84~88)は中国産の青磁と考えられ、86を除く他は龍泉窯系のものと考えられる⁽⁸⁾。86は管見に及ぶ限りでは大阪府堺市菱木下遺跡に類例があ

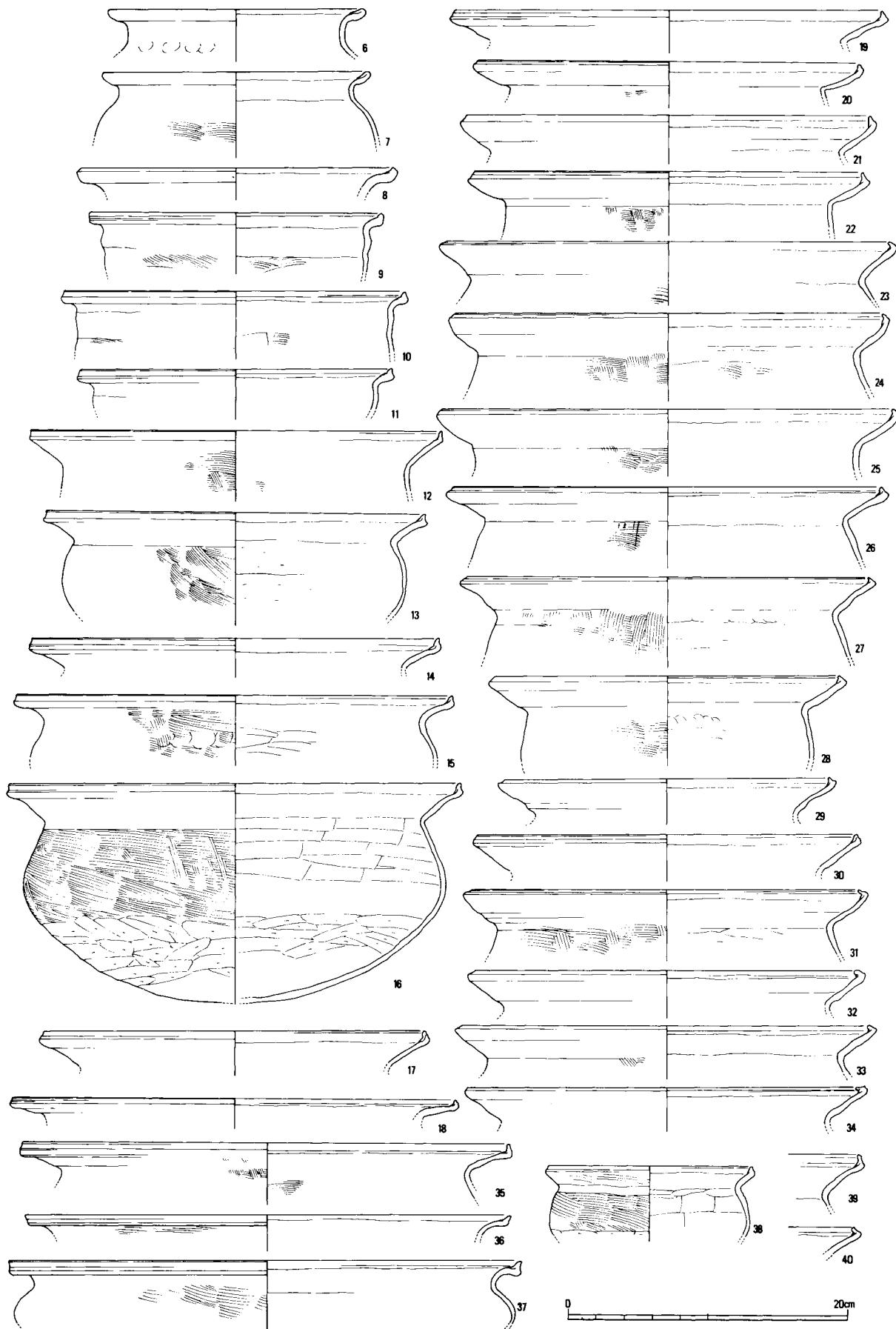


Fig.18 出土土器実測図(2) (scale = $\frac{1}{4}$)

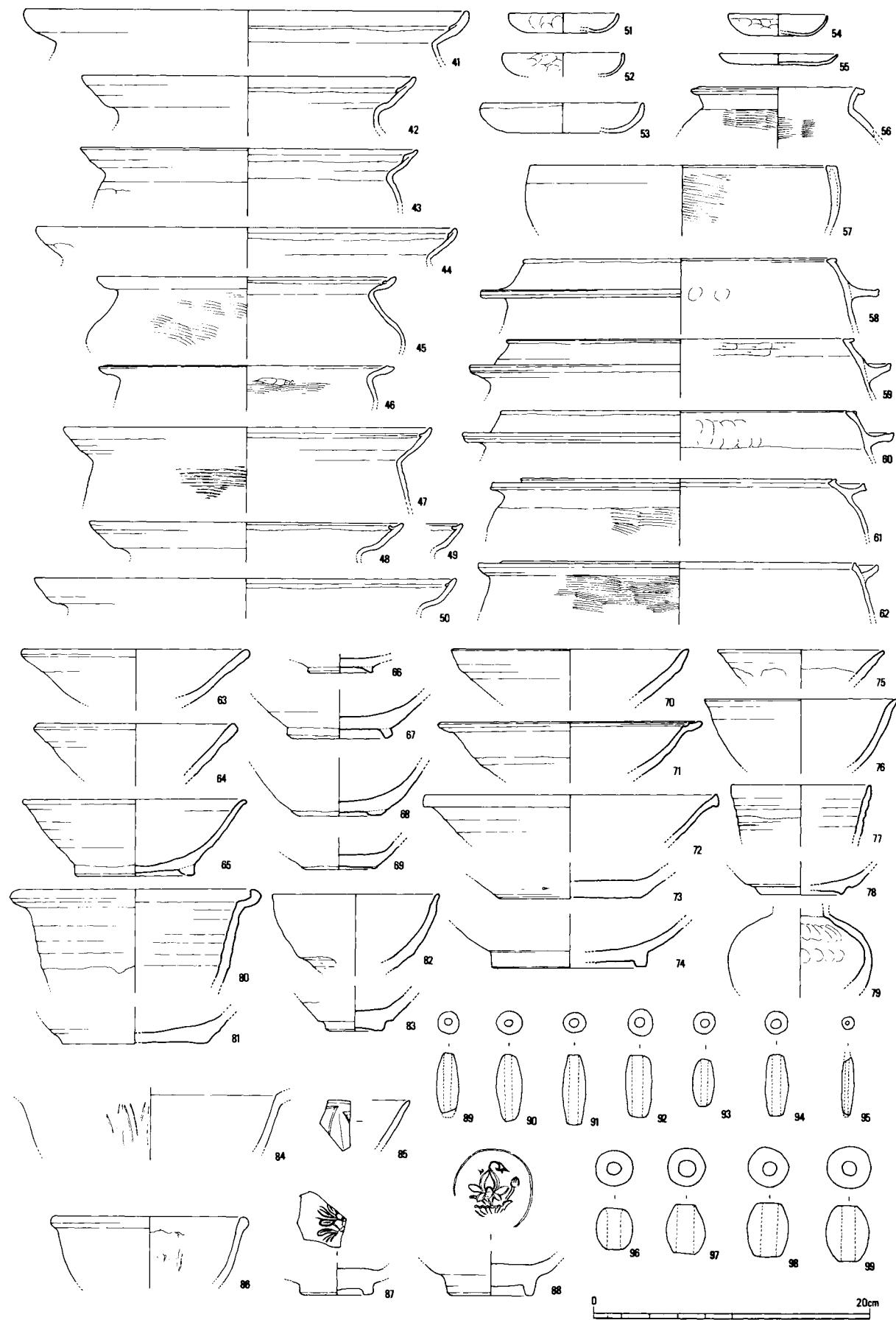


Fig. 19 出土土器実測図(3) (scale = $\frac{1}{4}$)

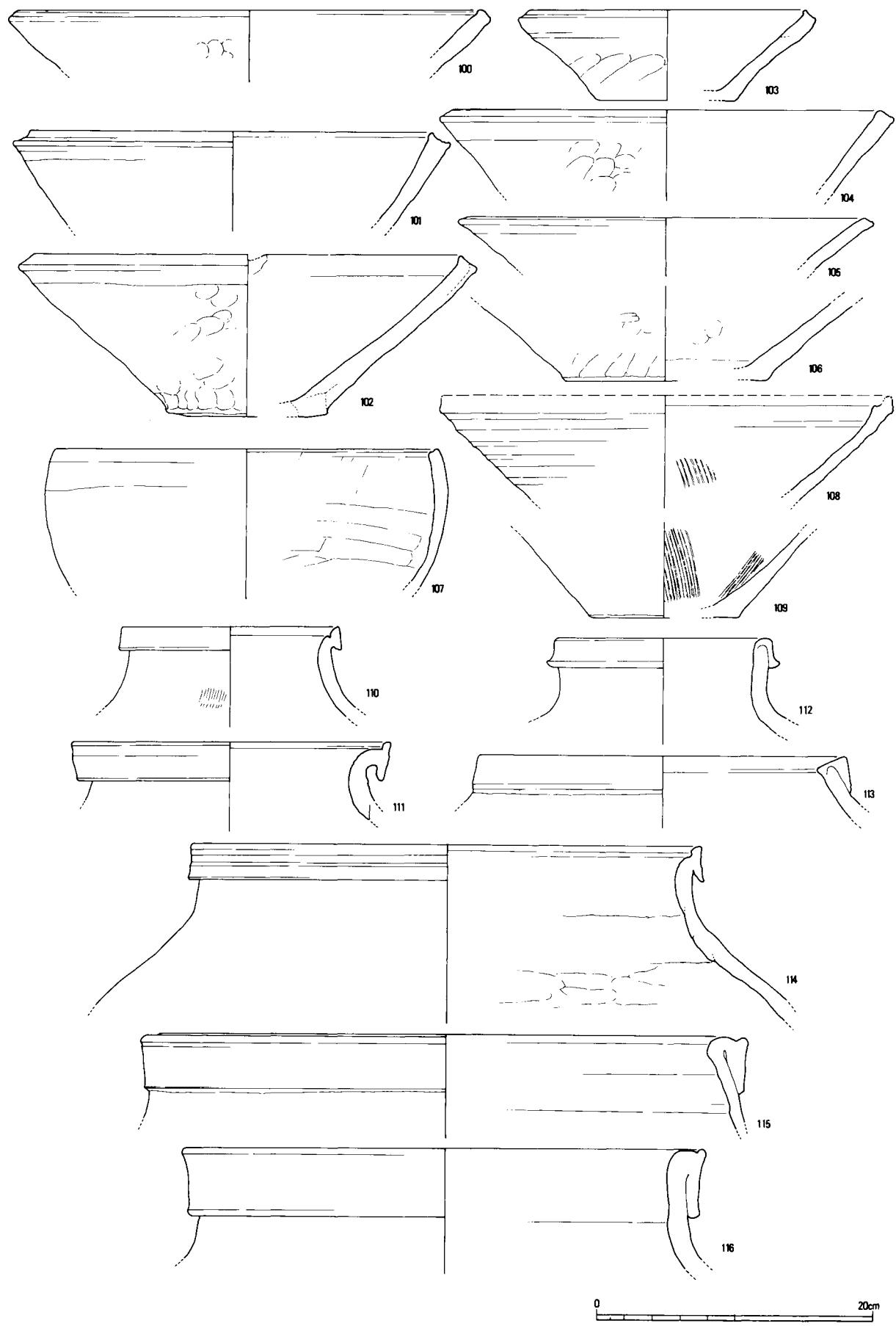


Fig. 20 出土土器実測図(4) (scale = $\frac{1}{4}$)

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測 No
1	土師器甕	C	S D 9	(口)15.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄褐色	> $\frac{1}{10}$		114
2	々 飯	A	中央灰褐砂層		外:指サエ・ナデのハ 内:ナデ	密 0.5~2.0mm の小石	々	淡褐色	地手 $\frac{9}{10}$		113
3	須恵器平瓶	D	S X 1	(口) 5.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗 0.5~1.0mm の小石	堅微	淡灰色	口縁 完形		38
4	々 甕	A	北 褐色土上砂層		外:並行線文タタキ 内:同心円文タタキ	密 0.5~3.0mm の小石	々	味淡 灰褐色 淡灰色			112
5	平 瓦	C	現代溝SD 8		外:布目痕、ヘラ切り痕 内:ナデ	密 0.5~3.0mm の小石	良好 (品質)	暗灰 ~明褐色			115
6	土師器鍋	D	S D 5	(口)18.7	外:指サエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	良好	黒(外) 淡黃灰 色	$\frac{1}{5}$	外面にスス	60
7	々 々	々	中 第1~2層	(口)19.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~1.0mm の小石	々	淡茶灰色	$\frac{1}{8}$	外面にスス	32
8	々 々	々	中 第1~2層	(口)23.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	々	黄褐色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	31
9	々 B ₃	C	2面 S D 10	(口)21.2	外:ハケメのちケヅリ・ヨコナデ 内:ナデのちケヅリ・ヨコナデ	密 0.5~1.0mm の小石	々	淡褐色	$\frac{1}{5}$	外面にスス	6
10	々 々	々	々	(口)25.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密 0.5~1.0mm の小石	々	々	$\frac{1}{5}$	外面にスス	9
11	々 々	々	々	(口)23.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	々	$\frac{1}{5}$	外面にスス	11
12	々 B _{1a}	D	S D 1	(口)29.9	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密 0.5~2.0mm の小石	々	淡茶灰色	$\frac{1}{10}$		62
13	々 々	B	褐色砂上貝層	(口)27.7	外:ハケメのちヨコナデ 内:ヨコナデのちケヅリ	密 0.5~1.0mm の小石	々	淡褐色	$\frac{1}{4}$	外面にスス	94
14	々 々	A	S X 1	(口)29.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	乳灰色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	75
15	々 々	D	中央 淡褐砂貝層	(口)31.9	外:指サエ・ハケメの ちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{1}{5}$		35
16	々 々	A	中央 灰褐砂層	(口)33.1	外:ハケメのちケヅリ・ヨコナデ 内:ナデ・板ナデのちケヅリ・ヨコナデ	密 0.5~1.0mm 前後の小石	々	々	$\frac{1}{3}$	内面に炭化物 外面にスス	63
17	々 B _{1b}	B	畝内砂層	(口)28.1	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	々	$\frac{1}{8}$	外面にスス	108
18	々 々	々	褐色砂上貝層	(口)32.5	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	淡褐色 (スス)	$\frac{1}{10}$	外面にスス	99
19	々 々	々	貝層	(口)31.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	々	$\frac{1}{10}$	外面にスス	97
20	々 々	C	S K 3	(口)28.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡褐色 (スス)	$\frac{1}{10}$	外面にスス	24
21	々 々	B	褐色砂上貝層	(口)30.1	外:ヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡黄褐色 部黑色 (スス)	$\frac{1}{5}$	外面にスス	92
22	々 々	B	貝層	(口)29.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡茶灰色 (スス)	$\frac{1}{5}$	外面にスス	95
23	々 々	D	北 第1、2層	(口)33.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡黃白色	$\frac{1}{5}$	外面にスス	42
24	々 々	々	中 第2~3層	(口)31.9	外:ナデ・板ナデのちヨ コナデ 内:ナデ・板ナデのちヨ コナデ	密 0.5~1.0mm の小石	々	淡褐色	$\frac{1}{6}$	外面にスス	29
25	々 々	A	S X 1	(口)33.5	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡茶灰色	$\frac{1}{10}$		77
26	々 々	B	褐色砂上貝層	(口)32.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{2}{5}$	外面にスス	91
27	々 々	D	中 第2~3層	(口)30.0	外:ナデ・板ナデのちヨ コナデ 内:ナデ・板ナデのちヨ コナデ	0.5mm前後の 小石	々	々	$\frac{1}{5}$		28
28	々 々	A	中 1層下、貝層(S X 1)	(口)25.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデ・板ナデのちヨ コナデ	0.5~3.0mm の小石	々	々	$\frac{1}{5}$	外面にスス	64
29	々 々	々	S X 1	(口)24.5	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	0.5~1.0mm の小石	々	明乳灰色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	76
30	々 々	B	貝層(攪乱層)	(口)28.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	淡褐色 暗褐色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	98
31	々 々	C	S X 1	(口)29.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	0.5mm前後の 小石	々	淡黃灰色	$\frac{1}{5}$		20
32	々 B _{1c}	々	S D 10	(口)28.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	0.5~1.0mm の小石	々	淡茶灰色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	15
33	々 々	B	褐色砂上貝層	(口)30.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡褐色 暗灰褐色 (スス)	$\frac{1}{10}$	外面にスス	93
34	々 々	D	中央 上げ土	(口)29.1	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	50
35	々 B _{1a}	々	北 第1、2層	(口)35.7	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	0.5~3.0mm の小石	々	黄灰色	$\frac{1}{10}$		55
36	々 B ₆	々	中 第1~2層	(口)35.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:ヨコナデ	0.5~1.0mm の小石	々	淡茶灰色	$\frac{1}{5}$		30
37	々 々	C	1面下 S D 9 上	(口)37.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{1}{4}$	内・外面にス ス	12
38	々 B _{1a}	々	S D 10	(口)15.2	外:ハケメのちケヅリ・ 内:板ナデのちヨコナデ	粗 0.5~1.0mm の小石	々	明褐色	$\frac{1}{5}$	外面にスス	16
39	々 々	B	表土	(口)不明	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密 々	々	淡黃灰色	> $\frac{1}{10}$	外面にスス	100

tab. 1 出土土器観察表(1)

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎上	焼成	色調	残存度	備考	実測 No
40	土師器鍋B _{1b}	B	褐色砂上貝層		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰色 褐色(スヌ)	> $\frac{1}{10}$	外面にスス	101
41	々 A ₁	C	S D 10	(口)32.5	外:ヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	々	白茶灰色	$\frac{1}{10}$		8
42	々 A ₂	A	S X 1	(口)24.2	外:ヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	々	淡茶白色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	72
43	々 々	D	中央表土	(口)24.7	外:ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	61
44	々 々	C	S X 1	(口)30.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 々	々	々	$\frac{1}{5}$	外面にスス	22
45	々 A ₃	D	S K 1	(口)21.8	外:ハケメ・ナデのちヨ 内:ナデのちヨコナデ	粗 々	々	淡黄灰色	$\frac{1}{4}$		33
46	々 々	C	S D 10	(口)21.5	外:ナデのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密 0.5~1.0mm の小石	々	々	$\frac{1}{5}$		10
47	々 A ₄	A	中央表土下貝層	(口)26.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	々	淡茶灰色	$\frac{1}{5}$	外面にスス	67
48	々 々	C	1面下(S D 9上)	(口)22.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 0.5~2.0mm の小石	々	淡黄灰色	$\frac{1}{10}$	外面にスス	14
49	々 々	D	試掘塙内		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 0.5~1.0mm の小石	々	淡褐色	> $\frac{1}{10}$		118
50	々 々	A	南表土	(口)30.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	々 々	々	々	$\frac{1}{10}$	外面にスス	87
51	土師器小皿	B	褐色砂上貝層	(口) 8.1	外:指オサエ・ナデ 内:ナデ	々 々	々	淡茶灰色	$\frac{1}{5}$		96
52	々 々	A	S X 1	(口) 8.9	外:指オサエ・ナデ 内:ナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{1}{4}$		70
53	々 々	D	北第1層	(口)12.0	外:ナデ 内:ナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	々	淡黄褐色	$\frac{1}{5}$		43
54	々 々	A	中央表土下貝層 (高)1.5	(口) 7.3	外:手掌痕・ナデ 内:ナデ	密 0.5mm前後の 小石	々	淡褐色	$\frac{1}{3}$		66
55	々 々	々	中央表土下貝層	(口) 8.6 (高)0.8	外:指オサエ・ナデ 内:ナデ	々 々	々	乳灰色	$\frac{1}{5}$		74
56	々 茶釜	B	第2層	(口)12.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	粗 0.5~1.0mm の小石	々	淡褐色	$\frac{1}{4}$		107
57	々 鉢	A	中央表土下貝層	(口)22.3	外:ナデのちヨコナデ 内:ハケメ	密 々	々	々	$\frac{1}{8}$		89
58	々 々	D	表土	(口)22.9	外:ハケメのちヨコナデ 内:指オサエ・ナデ	々 々	々	々	$\frac{1}{10}$ ガク $\frac{1}{5}$		54
59	々 羽釜	々	中央上げ土	(口)25.4	外:指オサエのちヨコナデ 内:ナデのちケヅリ	々 々	々	淡黄灰色	$\frac{1}{5}$ 弱	外面にスス	34
60	々 々	C	S K 3	(口)26.0	外:ヨコナデ 内:オサエ・板ナデのちヨコナデ	々 々	々	々	$\frac{1}{5}$		25
61	々 々	々	1面下(S D 9上)	(口)23.2	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデ	々 々	々	明褐色	$\frac{1}{5}$		13
62	々 々	D	中央暗褐紗	(口)25.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデ	々 々	々	淡褐色	$\frac{1}{4}$	外面にスス	36
63	陶器塊	々	北第2層	(口)16.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗 々	堅微	淡灰色	$\frac{1}{4}$	通称・山茶塊	40
64	々 々	々	北第2層	(口)14.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 々	々	々	$\frac{1}{5}$	々 々	41
65	々 々	C	中央褐色土 (S D 9埋土)	(口)16.2 (高)5.4 (高台)8.7	外:回転ナデのち糸切り・ナデ 内:回転ナデ	粗 0.5~2.0mm の小石	々	々	底完形 口縁 $\frac{1}{3}$	々 高台にモミガラ痕	3
66	々 盆	々	S D 7	(高台) 4.7	外:回転ナデのち糸切り・ ナデ 内:回転ナデ	密 々	々	々	底 $\frac{1}{2}$	通称・山 盆	19
67	々 塹	B	側溝第2層白砂	(高台) 7.8	外:回転ナデのち糸切り・ ナデ 内:回転ナデ	粗 0.5~1.0mm の小石	々	々	高台 $\frac{1}{2}$	々 山茶塊	104
68	々 々	D	北第1、2層	(高台) 7.8	外:回転ナデのちナデ 内:回転ナデ	々 々	々	々	底 $\frac{2}{5}$	々 々	44
69	々 々	々	S D 5	(高台) 5.3	外:回転ナデのちナデ 内:回転ナデ	粗 0.5~4.0mm の小石	々	々	底 完形	々 高台にモミガラ痕	58
70	々 々	々	S D 8	(口)17.2	外:回転ナデのち袖 内:回転ナデのち袖	密 0.5~1.0mm の小石	々	淡緑灰色 (袖)	$\frac{1}{8}$	灰袖 美濃瀬? i?	48
71	々 鉢	C	S D 10	(口)19.4	外:回転ナデのち袖(上半) 内:回転ナデのち袖	粗 0.5~1.0mm の小石	々	白灰色	$\frac{1}{5}$	灰袖	7
72	々 々	B	S K 7	(口)21.4	外:回転ナデのち袖 内:回転ナデのち袖	密 々	々	淡緑灰色 白灰色(断)	$\frac{1}{4}$	々	105
73	々 壺	D	中央上げ土	(底) 10.5	外:ケヅリ 内:回転ナデのち袖	粗 0.5~4.0mm の小石	良好	淡茶灰色	底 $\frac{1}{2}$ 高台 $\frac{1}{3}$	々	49
74	々	A	中~南 畠下淡茶灰砂	(高台) 11.2	外:ケヅリ・袖 内:回転ナデのち袖	粗 0.5~1.0mm の小石	堅微	(袖) 淡緑灰色 白灰色	高台 $\frac{1}{3}$	ケヅリ出し高台	81
75	々 小皿	D	北端 上げ土	(口)12.1	外:回転ナデのち袖(上部) 内:回転ナデのち袖(上部)	密 々	々	淡緑灰色(袖) 淡灰色(断)	口縁 $\frac{1}{4}$	灰袖	52
76	々 塹	々	北第1、2層	(口)14.1	外:回転ナデのち袖 内:回転ナデのち袖	密 0.5~3.0mm の小石	々	緑~黃灰色 (袖)	口縁 $\frac{1}{5}$	灰袖 美濃瀬? i?	56
77	々 壺	A	中~南 畠下淡茶灰砂	(口)10.0	外:回転ナデのち袖 内:回転ナデのち袖	密 0.5~1.0mm の小石	々	(袖) 淡緑灰色 白灰色(断)	口縁 $\frac{1}{5}$		83
78	々	B	北部 落ち込み	(高台) 6.1	外:ケヅリ・袖 内:回転ナデのち袖	粗 0.5~1.0mm の小石	々	暗灰色	高台 $\frac{1}{4}$ 台	ケヅリ出し高台	103

tab. 2 出土土器観察表(2)

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測 No
79	陶器 小壺	A	南表土	(頸) 4.2	外:回転ナデのち釉 内:指オサエ・ナデ	密 φ0.5~2.0mm の小石	堅緻	暗赤茶色	1/4		86
80	々 鉢	C	S D 9	(口)16.0	外:回転ナデのち釉 (上) 内:回転ナデのち釉	φ0.5~1.0mm の小石	々	(釉)淡緑黄色 (断)淡灰色	1/3	灰釉	2
81	々 々	々	(底)	10.8	外:回転ナデのち系切り 内:回転ナデのち釉	々	々	々		灰釉 No.80と同じ?	4
82	々 天目茶碗	C	S D 10 杭列内 P 1	(口)12.3	外:回転ナデ・ケヅリの ち釉 内:回転ナデのち釉	々	々	(釉)茶~黒褐色 (断)淡灰色	1/5	鉄釉 美濃瀬戸	5
83	々 々	A	中~南 畝下淡茶灰砂	(高台) 4.3	外:回転ナデ・ケヅリの ち釉 内:回転ナデのち釉	々	々	(釉)黒褐色 (断)白灰色	底 完形	々 ケヅリ出し高台	82
84	磁器 碗	々	南表土		外:蓮弁文、釉 内:釉	φ0.5mm前後の 小石粒	々	(釉)淡緑灰色 (断)淡灰色	1/10	青磁 龍泉窯系	78
85	々 々	D	S D 9		外:蓮弁文、釉 内:釉	々	々	(釉)淡緑色 (断)白灰色	1/10 弱	青磁 龍泉窯系	117
86	々 々	C	S D 9	(口)14.4	外:釉 内:陰刻文様・釉	々	々	(釉)暗緑色 (断)淡灰色	1/4	青磁	1
87	々 々	D	S D 5	(高台) 5.5	外:ケヅリ・釉 内:花弁文・釉	密	々	(釉)淡緑色 (断)白灰色	2/5	青磁 ケヅリ出し高台	59
88	々 々	B	側溝(貝層上)	(高台) 6.4	外:ケヅリ・釉 内:蓮弁文・釉	φ0.5mm前後の 小石	々	(釉)淡緑色 (断)白灰色	高台 完形	青磁 龍泉窯系 ケヅリ出し高台	106
89	土鉢	A	中央 灰褐砂層	(径)1.2 (孔径)0.5	外:ナデ	φ0.5~1.0mm の小石	良好	淡赤灰色	ほぼ 完形		116
90	々	々	中~南 畝下淡茶灰砂	(長)4.9 (幅)8~1.9 (孔)0.5	外:ナデ	々	やや 軟	々	々		80
91	々	D	北 第2層	(長)5.1 (幅)1.7 (孔)0.4	外:ナデ	々	良好	明赤褐色	々		51
92	々	A	S X 1	(長)4.4 (幅)8~2.0 (孔)0.7	外:ナデ	粗 φ0.5~2.0mm の小石	やや 軟	淡褐色	々		73
93	々	B	灰色砂貝層	(長)3.5 (幅)1.6 (孔)0.5	外:ナデ	φ0.5mm前後の 小石	良好	明黄褐色	々		110
94	々	C	S D 7	(長)4.5 (幅)3~1.6 (孔)0.6	外:ナデ	φ0.5~1.0mm の小石	々	淡褐色	完形		17
95	々	A	北 褐色土上砂層	(長)4.2 (幅)10.8 (孔)0.2	外:ナデ	々	々	々	ほぼ 完形		68
96	々	々	北隅 淡灰色砂	(長)3.0 (幅)2.6 (孔)1.0	外:ナデ	々	々	赤褐色	々		90
97	々	B	北部落ち込み	(長)3.5 (幅)2.9 (孔)1.2~1.3	外:ナデ	々	々	白灰色	々		102
98	々	D	北端表土	(長)3.8 (幅)3~1 (孔)1.2	外:ナデ	々	々	淡茶灰色	完形		53
99	々	C	S D 7	(長)4.1 (幅)3~1 (孔)1.0	外:ナデ	粗 々	やや 軟	淡黃灰色	々		18
100	陶器、捏鉢	A	I層下 中央貝層	(口)35.2	外:ナデのちヨコナデ 内:摩耗	φ0.5~3.0mm の小石	堅微	淡茶色	1/10 強	常滑	69
101	々 々	C	南 第II層淡褐砂	(口)32.0	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデ	φ0.5~4.0mm の小石	々	茶灰色	1/5	々	26
102	々 々	A	中央 1層下貝層	(口)33.4	外:ナデのちヨコナデ 内:摩耗	々	々	明茶色 (灰茶)	1/5	片口あり	65
103	々 々	C	S X 1	(長)21.8 (幅)10.4 (高)6.4	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデ	φ0.5~3.0mm の小石	々	赤褐色	1/4	常滑	21
104	々 々	D	中 第1~2層暗褐砂	(口)33.1	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデ	φ0.5~5.0mm の小石	々	々	1/3	々	37
105	々 々	々	中 第1~2層	(口)30.2	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデ	φ0.5~4.0mm の小石	々	暗褐色	1/10	々	39
106	々 々	A	中~南 畝下淡茶灰砂	(底) 15.2	外:ナデ 内:ナデ	φ0.5~3.0mm の小石	々	々	1/5	々	84
107	々 鉢	D	S D 5	(口)28.2	外:ナデのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	φ0.5~4.0mm の小石	々	暗赤褐色	1/4	々?	45
108	々 捺鉢	々	S D 1	(口)33 前後	外:回転ナデのち釉 内:回転ナデのちハケメ	φ0.5~2.0mm の小石	々	暗紫色	1/10	鉄釉 美濃瀬戸	57
109	々 々	々	S D 8	(底) 11.2	外:回転ナデのち釉 内:回転ナデのちハケメ	φ0.5~3.0mm の小石	々	暗赤茶色 (断)淡茶灰色	1/5	々	47
110	々 壺	A	中央 試掘坑内	(口)16.0	外:タタキメ(?)のち 内:回転ナデ	粗 φ0.5~2.0mm の小石	々	(外)淡灰色 (内)暗茶色	1/5	常滑	88
111	々 瓢	D	S D 5	(口)23.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	々	暗赤褐色	1/5	々	46
112	々 壺	A	中~南 畝下淡茶灰砂	(口)15.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗 φ0.5~4.0mm の小石	々	(外)淡茶色 (内)暗茶色	1/5 弱	々	79
113	々 瓢	々	南半 近代客土内	(口)26.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	φ0.5~6.0mm の小石	々	(外)暗褐色 (内)茶色 (断)茶色	1/8	々 自然釉	85
114	々 々	C	南 第II層淡褐砂	(口)37.3	外:回転ナデ、ナデ 内:ナデ、回転ナデ	φ0.5~3.0mm の小石	々	(外)暗褐色 淡緑灰色 (内)暗茶色	々	々 々	27
115	々 々	々	S X 1	(口)44.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	φ0.5~7.0mm の小石	々	暗緑褐色	1/10	々	23
116	々 大甕	A	中央 I層下貝層	(口)38.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	φ0.5~8.0mm の小石	々	暗茶~ 暗茶灰色	1/10	々	71

tab. 3 出出土器観察表(3)

る⁽⁹⁾。

土鍤

12点あり、11点を図示した(89~99)。92、97、99は端部が面取りされている。

(註)

- (1) 用語的には問題があるが、古墳時代以降から技術的に連続と続くものと考えているため、とりあえず「土師器」と呼称しておく。
- (2) 新田洋「平安時代～中世における煮沸用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の観書」『三重考古学研究』I (1985年)
- (3) 伊藤裕偉「丹生地区内遺跡群」『昭和63年度県営農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第一分冊 (三重県教育委員会 1989年 編集中)
- (4) 註(3)文献
- (5) ここで言うA₁…A₄は、鍋BのB₁…B₆と同じ意味ではない。前者は形態分類を表したものであり、後者は組成の分類を表したものである。したがって、A₁…A₄は将来的に型式か形式を明確にした後に別の言葉で置き換えるべきものである。
- (6) 註(2)文献
- (7) 美濃・瀬戸窯製品については、藤澤良祐氏の編年を、常滑窯製品については、赤羽一郎氏の編年を、それぞれ基準とした。藤澤良祐「総括－瀬戸大窯の編年的研究－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館 (1986年) 赤羽一郎『常滑焼－中世窯の様相－』考古学ライブラリー23 ニューサイエンス社 (1984年)
- (8) 森田勉「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究』第1号 (1981年)
- (9) 佐久間貴士「大阪菱木下遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第4号 (1984年)

V. 調査のまとめ

今回の調査は総延長260mの線的な発掘であったが、東海道遺跡の性格を考える上で、わずかながらでも資料を呈示することができた。ここでは東海道遺跡の調査によって得た資料から2、3の問題点をとり上げ、まとめとしたい。

まず、国府地区内における遺跡の立地と性格に関しての問題がある。今回の調査区域は砂によって形成された土壤である。これは海岸から押し寄せる砂の堆積作用によるものと考えられる。さらに、西暦1900年前後に作成された地形図によれば、調査区近辺には沼池状のものがあり、地理学的には潟湖と考えるのが妥当であろう。そうすると、東海道遺跡の出土土器が示す鎌倉～室町時代には、この沼池がど

こまで及んでいたのかという問題が生じる。今回の調査区では時期を示す明瞭な遺構はほとんど認められなかったが、C区溝S D 9・10がほぼ16世紀中頃を中心とした時期と考えられることや、D区南半の落ち込みS X 1が沼池に関連した遺構であることを併せて考えれば、少なくとも16世紀中頃までは沼池が今回の調査区に接するまで存在していたものと考えられるのである。Fig. 1に見える沼池は、潟湖の、より小さくなった姿と考えるのが妥当であろう。

このようなことからも、東海道遺跡は集落地として適さない立地といえる。しかし、この立地条件としては比較的の多いことが注意される。立地的には調査区西側の丘陵裾に居住地があった可能性を考えるべきで、調査区内はそれに伴なう区域（耕地など）といえよう。また、地表面に土器の散布が多いことは、この調査区付近の土地が区画整理されていることも考えなければならない。

出土遺物の中では、まず凹石状石製品が注目される。これは形態的には縄文～弥生時代に認められる「凹石」と呼ばれているものとよく似ている。しかし、調査区内では縄文～弥生時代の遺物は一切認められず、出土地点も中世の溝（C区・溝S D 9）からである。これは、あるいは縄文～弥生時代の遺跡が近辺にあって、そこから運んできて中世の溝に入ったものとも考えられる。しかし近辺にそのような遺跡は見出せず、また同一遺構中から3点出土していることなどから、転用されたものではなく、中世に何らかの意図をもって用いられていたものと考えたい。

これとは性格がやや異なるのであるが、度会郡南勢町迫間浦道瀬遺跡では「東南アジアの旧石器時代の諸遺跡から発見されるプロト・ハンドアックス」に極めて類似した古墳時代のものと見られる「礫石器」が出土している⁽¹⁾。伊藤秋男氏は、海岸部の遺跡にてこの種の「礫石器」がよく発見されることから、「魚貝・海草類の採集と加工業に用いられた道具」と考えている。形態的にはやや異なるものの、当遺跡の「凹石状石製品」も同種のものと考えられる。このような石製品の存在は、あるいは志摩半島海岸部の生業に関する地域的特徴として抽出できる可能性を秘めている。

最後に土師器鍋について少し触れておきたい。今回分類した資料では、鍋Aの範疇に含まれるもののが比較的多いことと、鍋B₁の型式的な変異が追えそうである、ということが特筆される。鍋Aは、A₁→A₂→A₃という流れも考えられるが、法量の差による形態の違いも考えねばならないため、ここでは保留せざるを得ない。鍋A₄も形態的には鍋A₂と類似するものであり、製作者（集団）の違いも考えねばならない。

鍋B₁では、b・cが比較的目立つという傾向がある。これが先に指摘したような時間的な変遷として、三重県下全体で把かられるものであるか、あるいは志摩（国府地域）における傾向であるのかの判断は重要である。いわゆる「伊勢型鍋」は、新田洋氏による分類の7類⁽²⁾以降、その出土量が減る傾向にある。これは金属製鍋の普及が大きく関与していると考えられるのであるが、東海道遺跡の鍋B₁のb・c類が新田氏による分類の7類と8類の間を

埋めるものであるとするならば、金属製鍋の普及時期が旧伊勢国と旧志摩国ではやや異なるという可能性も考えなければならない。あるいは鍋B₁の型式的变化が旧志摩国ではより明瞭で、旧伊勢国では不明瞭であるとも考えられる。

いずれにしても新田分類による8類以降、形態的には「焙烙」という形をとる「伊勢型鍋」の系譜は、「鍋」という形を捨てる以上、他のものによる補完が行われないことには日常の煮炊きが行えなくなる。その意味からも鍋B₁の系譜の追求は当該時期の煮沸具転換の問題を大きく前進させることとなる。

(註)

(1)伊藤秋男「第6章総括」「追間浦道瀬遺跡」（南勢町埋蔵文化財

調査報告2 南勢町教育委員会 1976年）

(2) 新田洋「平安時代～中世における煮沸用具—「伊勢型」鍋－に関する若干の観察」『三重考古学研究』I (1985年)

図 版

調査区近景・作業風景



調査区近景・手前はA区（北から）



作業風景（B区）



A
区

全景及び東壁土層断面（南から）



溝群全景（南から）



第1面上畠状遺構（北から）

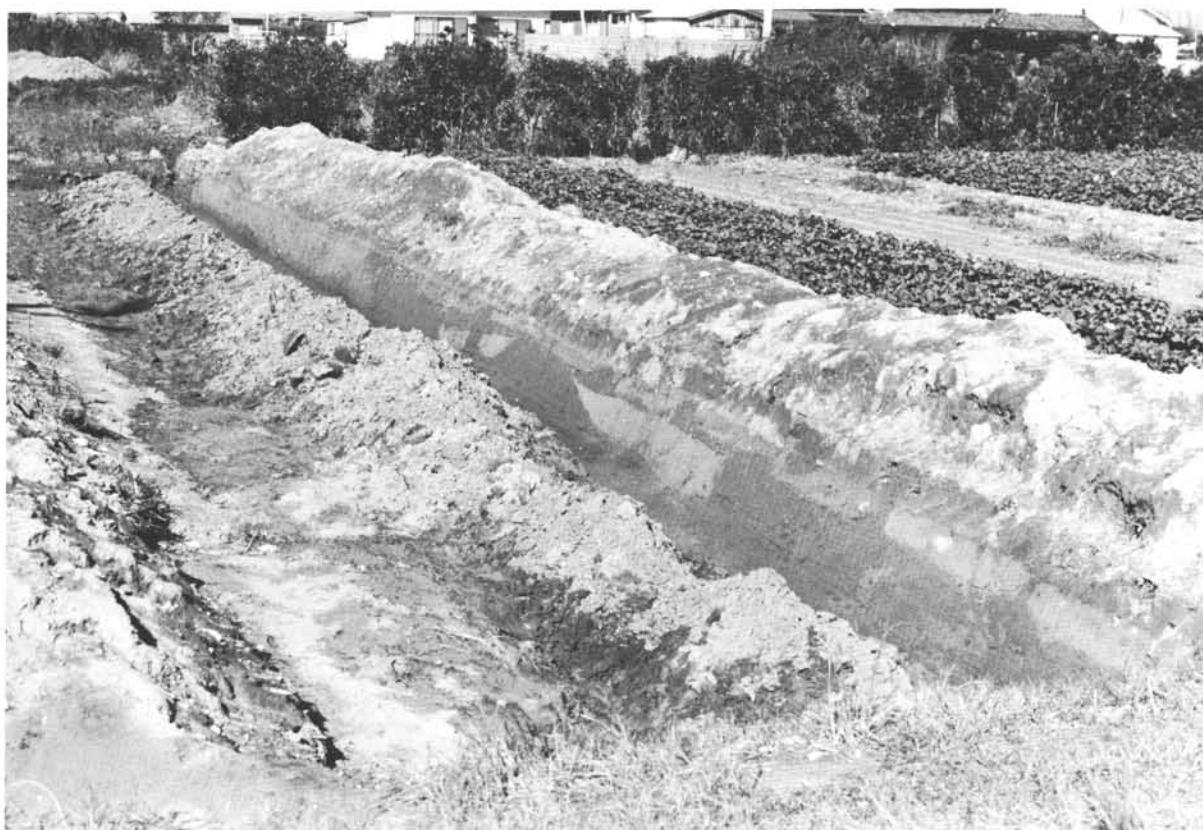


畠状遺構土層断面（東から）



第1面下全景（北から）

B
・
C区土層断面



B区東壁土層断面（南西から）



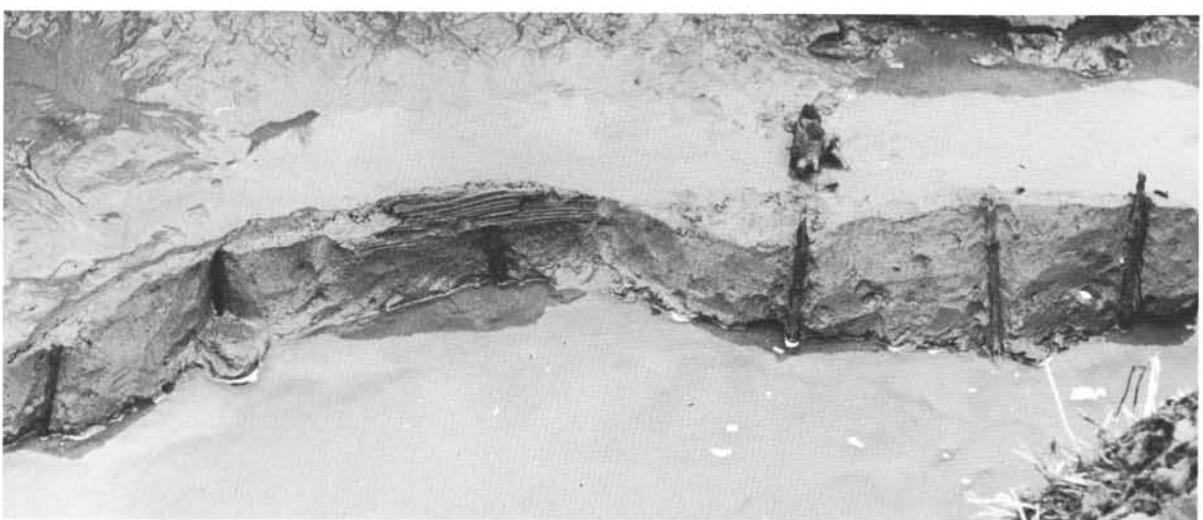
C区北壁土層断面（南から）



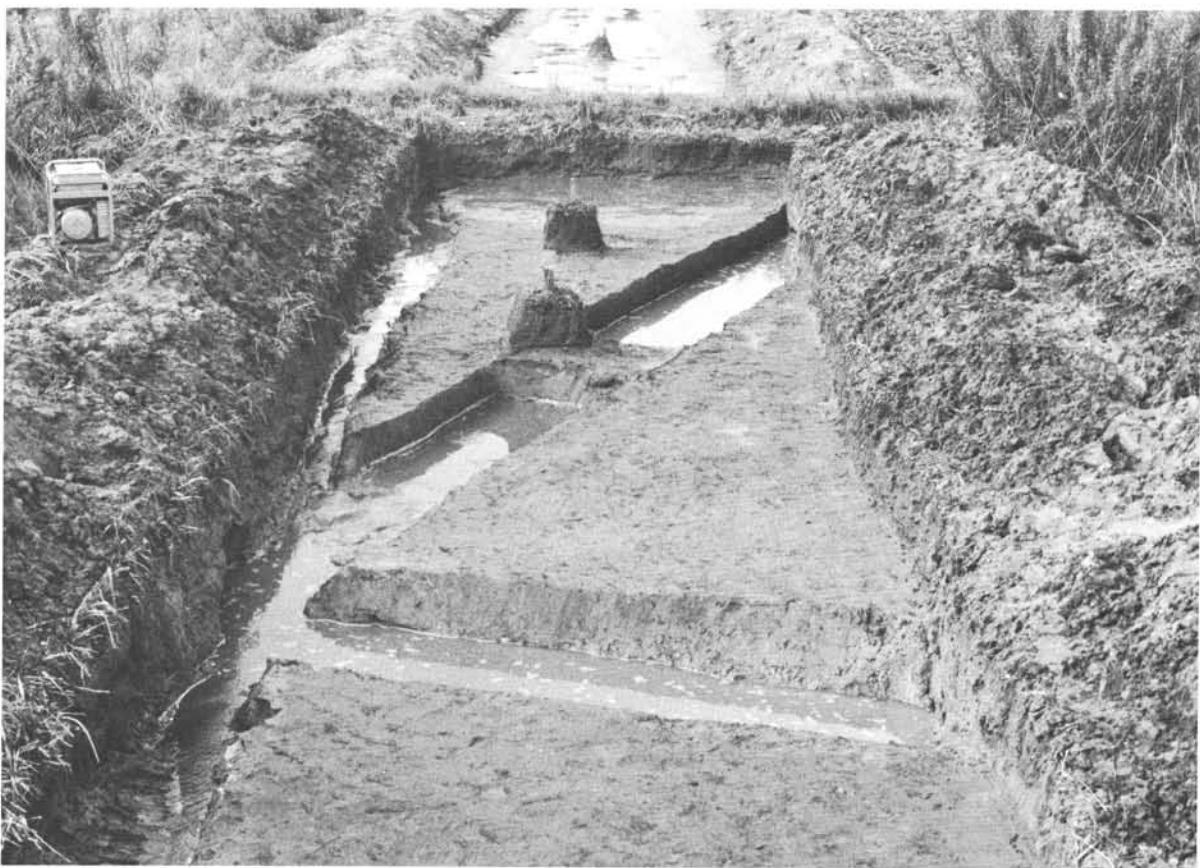
全景（北から）



溝 S D 10（南西から）



溝 S D 10杭列（北西から）



第1面北部（南から）



第1、2面南部（南から）



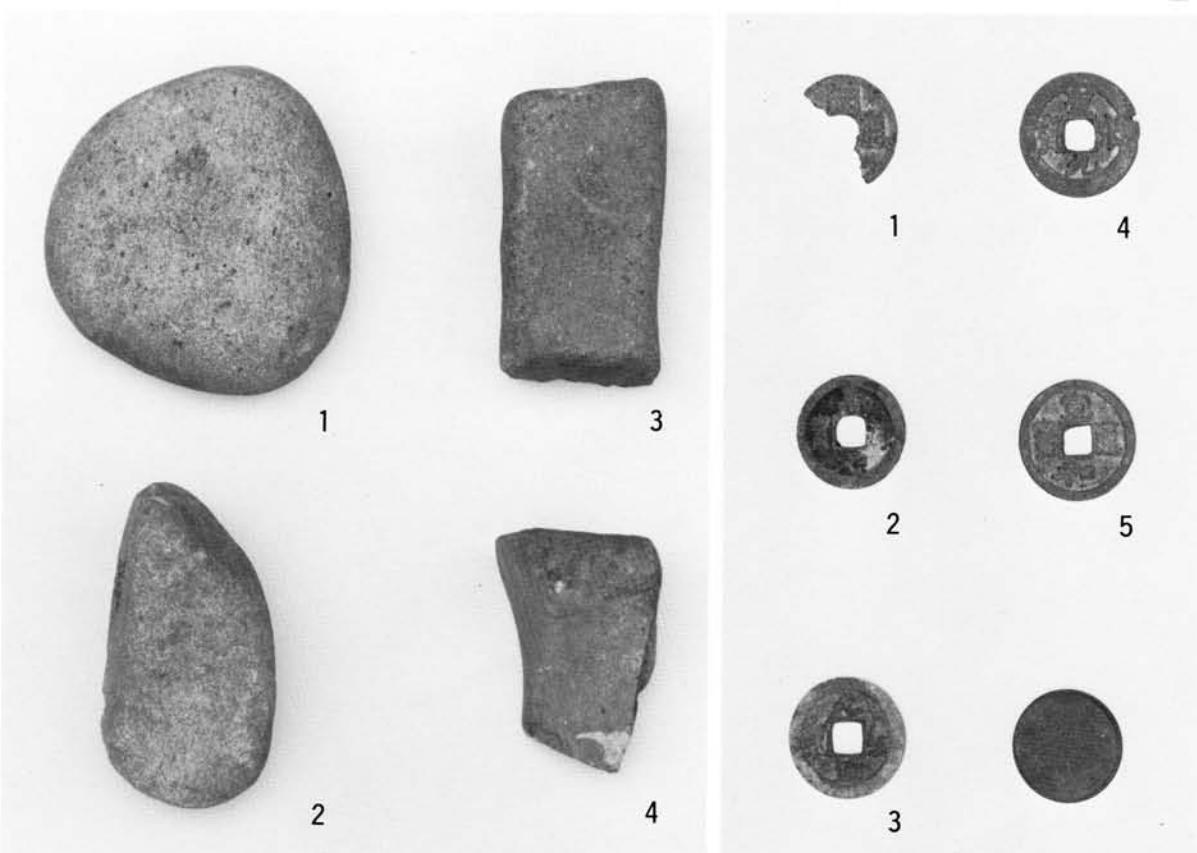
D区

全景（北から）



溝 S D 1、2、3、9 近景（南東から）

出土石製品・貨幣・土器

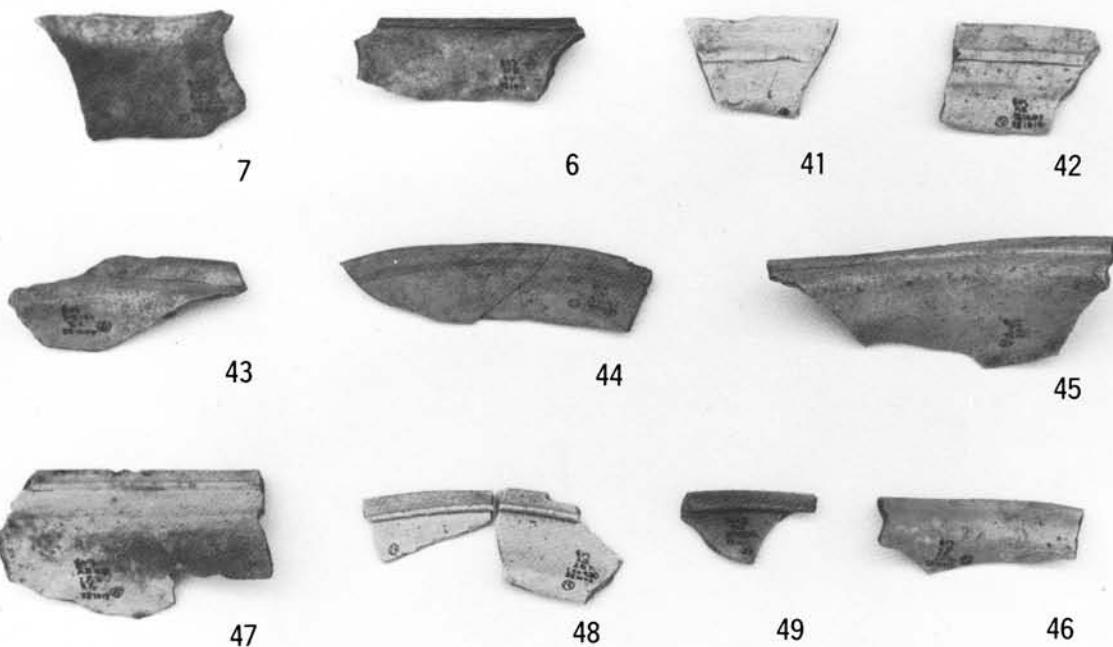


石 製 品 (fig. 13, 14)

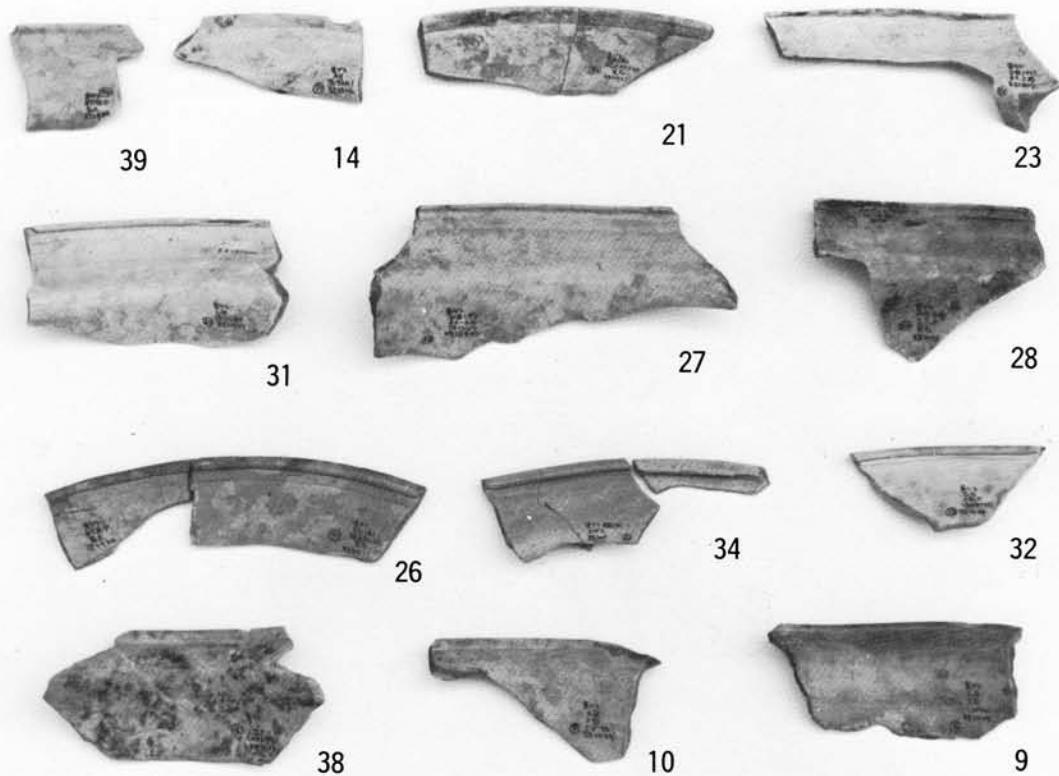
貨 幣 (fig. 12)



土 器 (fig. 16, 18)

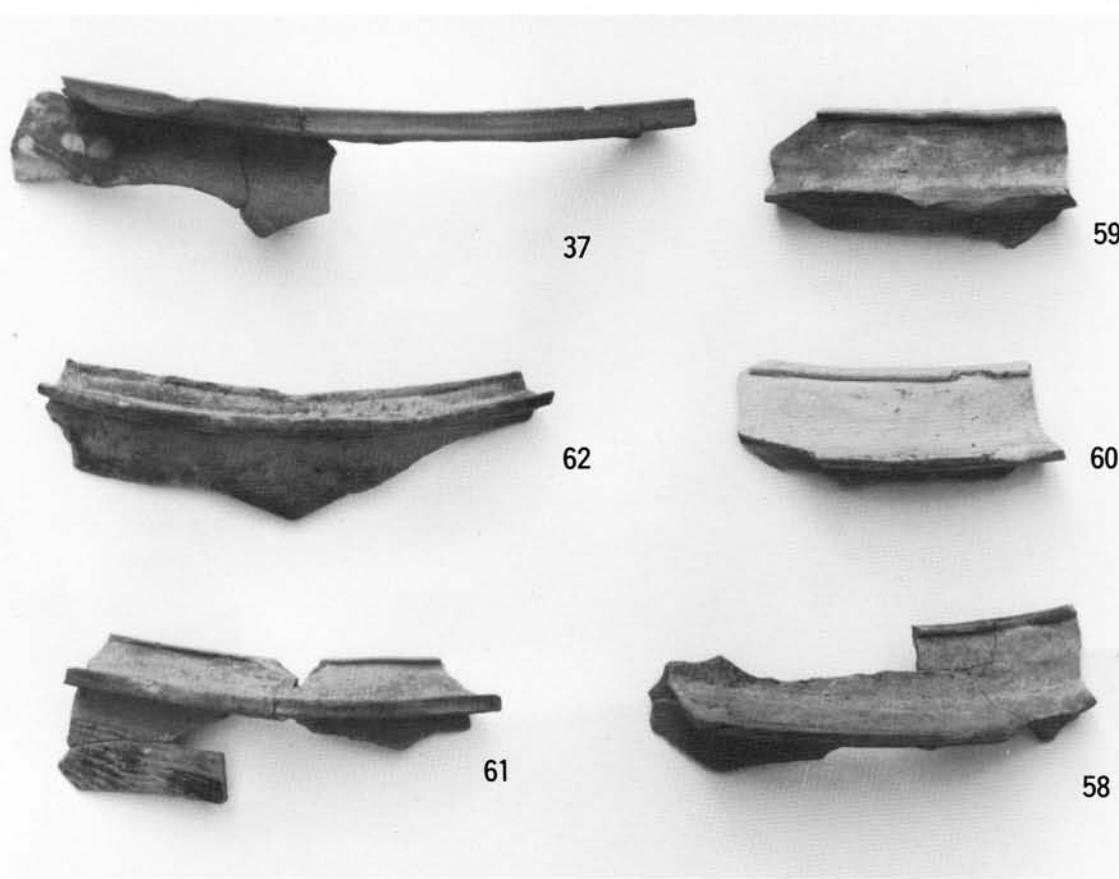


鍋A (fig. 18, 19)

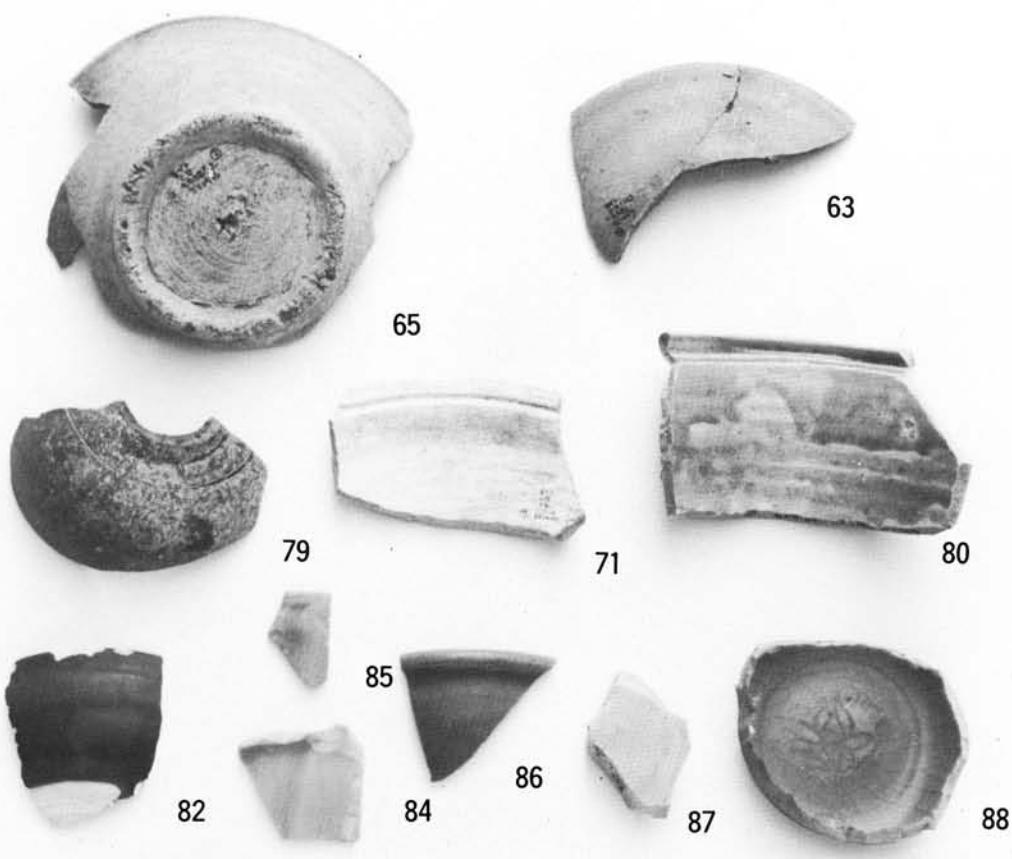


鍋B (fig. 18)

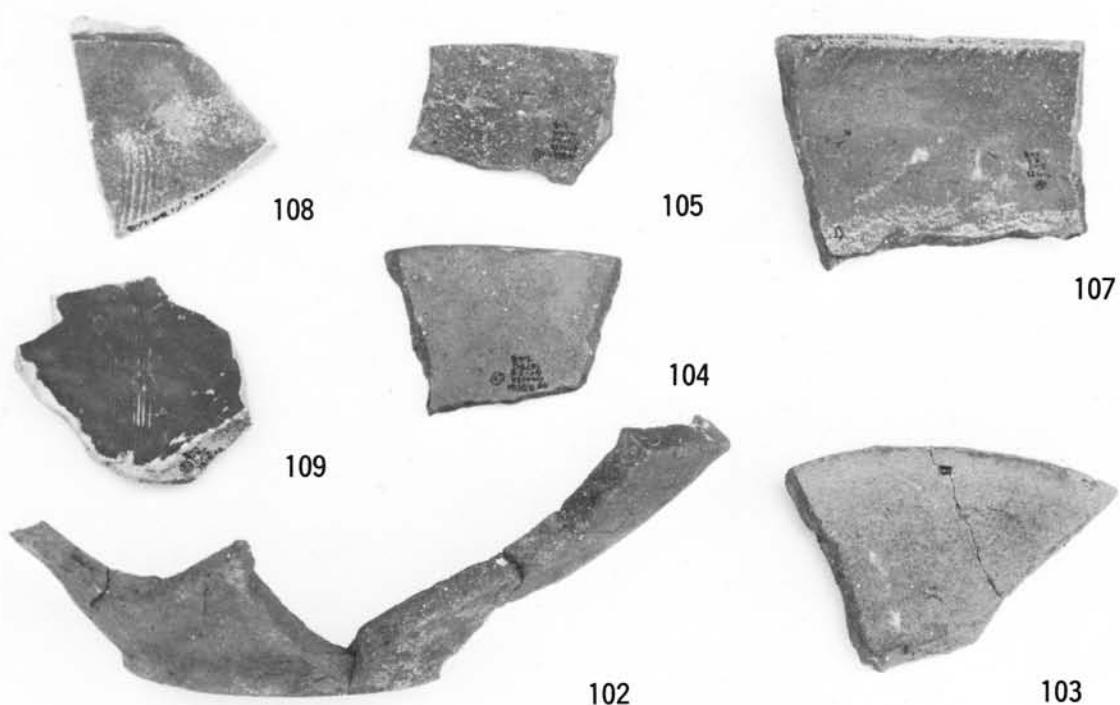
出土土器・土師器（鍋・羽釜）・陶器・磁器



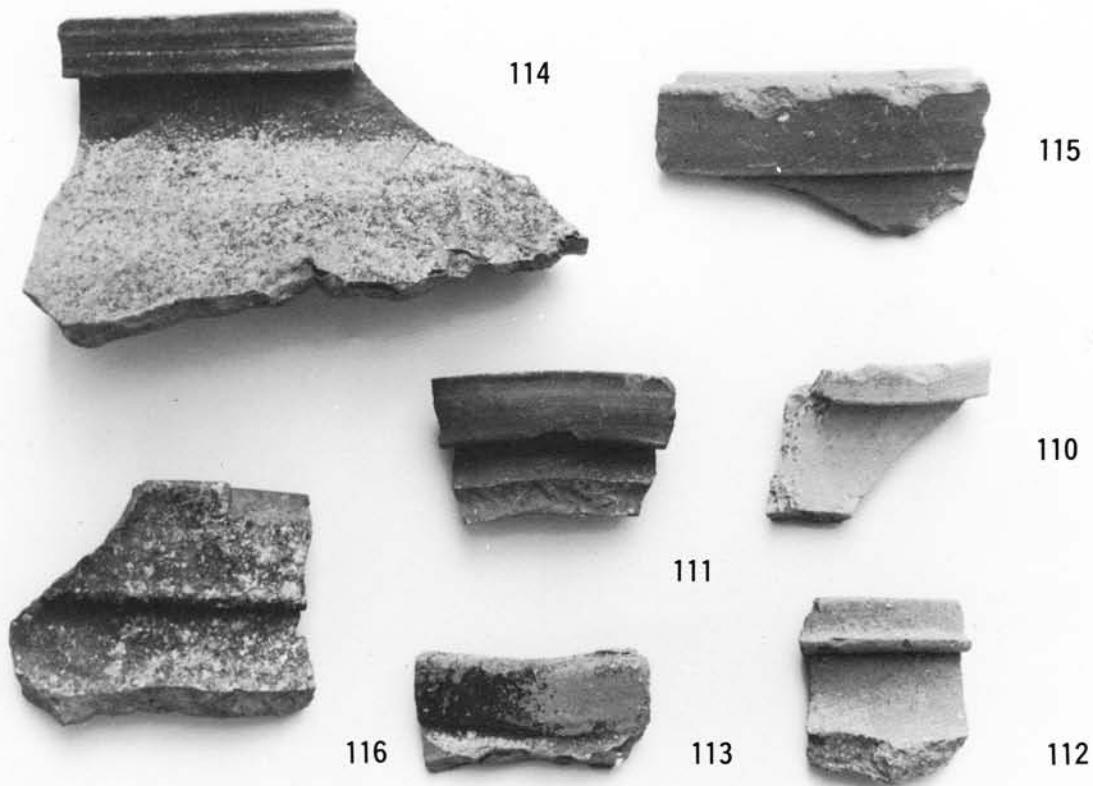
鍋・羽釜 (fig. 18, 19)



陶器・磁器 (fig. 19)



擂鉢・捏鉢 (fig. 20)



壺・甕 (fig. 20)

出土杭及び東海道地区表採和鏡



C区溝 S D10出土杭 (fig. 15)



東海道地区表採和鏡 (fig. 4)

平成元(1989)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告86

磯部大王自転車道整備事業に伴う
東海道遺跡発掘調査報告

平成元年3月

編集 三重県教育委員会
発行

印刷 オリエンタル印刷株式会社
